花咲く歌を夜明けにつなぐ。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花咲く歌を夜明けにつなぐ。

【Nコード】

N8141V

【作者名】

津森太壱。

【あらすじ】

これまでひとりを買ってきた、花盛りも過ぎた王女に持ち込まれたのは、大国の皇子との縁談。国の後継者である王女は、気が乗らないながらも、国のために皇子を婿に迎え入れることになったが…。

00 : たから。(前書き)

ようこそおいでくださりました。
楽しんでいただけたら幸いです。

00 : たから。

きみは知っているかい？

あそこには、大層な宝があるそうだ。
どんな宝だと思う？

ああ、残念だがわたしは知らない。
見たことがないからね。

だが、話を聞くと気になるだろう。

あそこにどんな宝が眠っているのか。
わたしは気になって仕方なくてね。

だから見てこようと思う。

奪うつもりはないよ。

ただ見るだけだ。

なぜ見るだけにするかって？

そんなのは決まっている。

その宝は、見ることしかできないらしい。

自分のものにはできないらしい。

つまり、奪えない。

それは呪いがかかっているからだ？
違うよ。

呪いなんかない。

どうやらね、その宝はわたしたちの心に訴えかけるらしい。
どんなふうに訴えられるかは、やはりわからないがね。

それらの真意を確かめるためにも、わたしは見てこようと思う。
今からとても楽しみだよ。

宝を見て、わたしはどう思うだろう。
なにを感じるだろう。
とても、とても楽しみだよ。

数年前に建立されたばかりだろう家屋を、小高い丘から眺めた。
とても大きくて、とても広い。流れる空気は穏やかで優しく、いか
にも幸せそうな家族向けの家屋だ。

ふん、と鼻で笑う。

幼い頃に聞かせられた宝の話を思い出した。

「それがあんたの宝か」

ばかにするわけではないが、自分にはあまりにも不似合いで、あ
んなのは追いかけていられないと想着ってしまう。

「まあ、人それぞれに、宝はある」

人の宝、人の幸せ、それらはすべてそれぞれだ。だから、否定も
しなければ肯定もしない。その必要もない。たとえ自分には到底理
解できなくても。

「クロ」

「ん、今行く」

「……なにか見えるのか？」

「世界」

「随分と壮大なものを……」

「そうでもない」

自分呼びに来た悪友におどけて笑って、クロは眺めていた家屋から視線を外した。

「さて、ここからはどうする？」

「どうするって……まあどうもしようがないんだけどね」

「随分としおらしくなったな、クロ」

「ははは……逃げようにも逃がしてくれないじゃないの」

「それがおれの仕事だからな」

「はあ……いいよ、半ば諦めてはいるからね」

「半ば？」

にやり、と意地悪く笑う悪友に、もはやクロの諦めは境地に近い。

「今から逃げてもいい？」

「べつにいいけど、どこに逃げるんだ？」

そう、問題はそこにもある。クロには逃げ場がない。まずは目の前の悪友が大きな壁だ。

だが、それでも、逃げたいと思うのは仕方ない。

「おれ、もう少し世界を見たい」

「目的地に到着してからでも遅くはない」

「確証あるの？」

「おれがそう動いてやる。それでいいだろ」

「頼りになるお言葉ですこと……」

「信じろよ」

ぼん、と肩をたたく悪友の力は、とても頼りになる。だから信じていないわけではない。そう言う限りは、実行してくれると思う。

それなのにどこか信じられないのは、今ここに在る己れの状況だろつ。

「……これでいいのかなあ」

「まだ言ってるし」

そう言うが、この状況をどう受け入れたらいいのか、クロには未だ理解できない。悪友だって、クロがそうであることは承知しているはずだ。

「ほら、行くぞ。予定よりだいぶ遅れてるんだ。相手方には連絡済みでも、礼を欠いているんだからな」

「はいはい」

目的地がもつと遠くであつたらよかつたのに、歩いて二週間とはなんと近いのか。月日とはこんなにも短いものであつただらうかと、クロはため息をついた。

00 : たから。(後書き)

来月までは忙しいくせになにをやっているのじゃう……。。

楽しんでいただければ幸いです。

01 : らしくない。

その日、セムコンシャス王家の者たちは浮足立っていた。理由は明快だ。これまで女傑と謳われ、婚約者も、その候補も受け入れず、頑なにひとりを買っていた王女が、このたび漸く婚約者を迎えるからである。それも大国の皇子、噂などがまったく耳に入ってこない妙な皇子ではあるが、それでも大国の皇子が王女の婚約者になるのだ。

王や王妃を始めとした城内の人々は、抑えられない喜びに皆が満面の笑顔だった。

しかし。

「到着が遅れるとの知らせが入りました」

と、宰相は王に伝えた。

今か今かと待ちわびていた王や王妃は肩を落としたが、それでもすでに国は出立したとの話を聞き、ほっと安堵した。この縁談をなかつたことに、と言われないかと心配だったのだ。それが杞憂に終わり、ただ到着が遅れるというだけのことだ。

しかし。

「まだ、なのか」

予定では四日の行程が、一週間経つても到着しない。いくらなんでもこれは遅れ過ぎではないだろうか。

王や王妃は、どうしたものかと思案した。道に迷っているのか、それともなんらかの事故に遭っているのかと、迎えの隊を国境まで派遣した。

「な、いないっ?」

「通過した形跡すらありませんでした」

予想外なことに、皇子の行方はわからなくなってしまった。

この事態はさすがに王女の耳にも入ることになる。

「べつにいいわよ。どこで道草くつてようが、事故で死んでようが、わたしには関係ないわ」

「王女殿下、それは……っ」

残念なことに、王女は仕方なく大国との縁談を受け入れたがために、乗り気でもなければ成功させる気もなかった。大国の皇子を気にしている暇があるなら、政務に勤しむ人である。そもそも縁談を、国の体面的なものと捉えていた。

「殿下、この縁談は、とてもとても、大切なものなのです」

「国にとっては、そうでしょうね。けれど、わたし自身には最悪でしかないのよ」

「そうおっしゃらず、どうか、どうか」

王女を宥めるのも一苦労、しかしセムコンシヤス王家には王女しか後継者がおらず、その苦労をひたすら甘受するしかない。臣下の胃は、もはや幾度も穴が空いている。

「だいたい、こんなおばさんに婿入りするなんて、おかしいのよ。わたし、今年でいくつになると思っているの？ 帝国に踊らされたのよ、陛下は」

「そんなことおっしゃらないでください、殿下！」

縁談を蹴りまくっていた王女は、適齢期を幾分か過ぎてはいるものの、魅力がたくさんあった。本人は「おばさん」だと言い、着用する礼装も地味なものばかりで、装飾にも手を出さないが、この歳になっても国の貴族からは直接口説かれるほどの魅力がある。実は大国からの縁談の申し入れは、これが初めてではなかったりするのだ。片っぱしから王女が縁談を蹴りまくっていただけで、中にはさまざまな国からの申し入れがあったのである。

漸くまとまったかと思っただ縁談に、臣下を始めとした王や王妃は、大きく肩を落とした。

皇子はいつたい、どこに消えてしまったのか。

そんな、皆がもうどうしたらいいかわからないと、そう失望しかけていたある日のことだった。

「すみません」

と、王城の門番に声をかけた若い騎士がいた。

「はい？」

返事をした門番は、いつたいどこに属している騎士だろうと首を傾げながら、まじまじと騎士を見やった。どうやら二人連れのように、騎士の後ろにはひよろりとした青年が、ぼんやりと明後日の方向を眺めていた。

「トワイライ帝国近衛騎士、二の隊副長、ノルイエ・ファン・ラッシュと言います」

「は……トワイライ帝国？」

それは、迎え入れる予定の大国の皇子の、国名であった。騎士は、その国の近衛騎士だと名乗ったのである。ノルイエという騎士は、それからすぐ後ろの青年を引っ張り、門番の前に立たせた。

「こいつ、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライと言って、トワイライ帝国の皇子なんですけど」

「……、皇子？」

「ええ、そう見えませんがね」

「……皇子？」

「婿入りする予定なんですけど、当初の予定からだいぶ到着が遅れてしまいましたね」

ははは、と笑う騎士に、門番はたびたび耳を疑う。

「……皇子？」

三度めにそう訊いたとき、へらりと、青年が笑った。

「どうも、クロネイです」

それは確かに、大国から迎え入れる予定の、皇子の名であった。

トワイライ帝国の皇子、クロネイが、従者もつけず騎士とふたりだけでセムコンシャス王国の城に到着した話は、あつというまに城内に広まった。もちろん、王女の耳にも早々に届いた。

「騎士と、ふたりだけ？」

「ええ、そのようです」

「車は？」

「ありません」

「荷物は？」

「多少の持ち物はあるようですが」

「単品？」

「殿下、それは失礼かと」

そのとき王女は、瞬間的に「変な皇子が来たかもしれない」と、その面白さに興味惹かれた。ゆえに、思わず声を上げて笑っていた。

「な、なんてこと……っ……なにその皇子」

「殿下……っ？」

「迷子になっていたわけでも、事故に遭っていたわけでもなかったのね。これだけ遅れて、いったいなにをしていたのかしら」

久しぶりに、腹の底から笑った。どうでもいいと思っていたことだが、人間的に皇子には興味が湧いた。

「ジーン、わたしを案内してちょうだい。ちょっと逢ってみたいわ」

「今は王陛下と謁見しておられるようですが」

「かまわないわ。陛下も、わたしと同じように腹の底から笑っているでしょうね」

笑った衝動で溢れた涙を拭いながら、王女は侍女に案内させ、漸く到着したという皇子がいる場所へと向かう。廊下を進むたび、仕官たちが王女を振り向きはしたものの、その双眸は喜びや安堵、それに混じった不安などが含まれていて、しかし王女を不快にさせるほどの力はなかった。

王と皇子が謁見しているという広間の扉を前にして、王女は衛兵ににこりと笑いかけ、それから堂々と入室する。王女の予想に反して、謁見の間は静まり返っていた。というよりも、場違いな姿に、誰もが言葉を失っていた。

「こんにちは、はじめまして」

王女がそう声をかけて、初めて皆が王女の登場にハツとした。もちろん王女は皇子に声をかけたので、皇子も振り向いた。その姿は、あまりにも皇子らしくはなかったけれども。

「こんにちは、はじめまして。おれはクロネイっていうんですけど、あなたがおれのお嫁さんかな？」

ぬけぬけと王女を「嫁」宣言した皇子は、にこにここと笑っている。周りに花を咲かせている幻覚をみせるような笑みだ。思わず目をこすりそうになってしまう。

「シャルナユグ・ホロン・セムコンシャスよ。そうね、あなたがわたしのお婿さんかしら？」

花の幻覚に惑わされそうになりながらも、どうにかそこは王族としての矜持で乗り切り、王女は微笑む。雰囲気は気圧されるなんて初めての経験だった。

「シャル姫？ シャナ姫？ それともシャググ姫？」

「……、はい？」

「あ、ルナ姫かな？ どう呼んだらいいですか？」

呼び名のことか、と突拍子もない問いに目が丸くなる。意表をよ
くついでくる皇子だ。

「お好きに、呼んでくださいませ？」

「では……シャナ姫、と。おれのことにはクロネと呼んでください、
シャナ姫」

「……姫という歳でもありませんし、けっこうです」

「そうですか？ では、シャナ」

にこ、と皇子は笑みを深めた。また周りに幻覚であるう花を咲か
せている。

と、そこに。

「あなたはクロで充分だ」

べし、と容赦ない平手で、皇子の後頭部を叩いた者がいた。皇子
が唯一連れてきたという騎士だ。皇族に対し無礼な振る舞いではあ
ったが、皇子の笑みは苦笑に変わっただけで、親しそうな雰囲気がある。

「痛いな……ああ、シャナ、こちらはノエです。ノルイエ・ファン・
ラツシュ。祖国で近衛騎士隊に所属していて、おれの婿入りについ
てきてくれた騎士です」

「お初にお目にかかります、シャルナユグ王女殿下。どうぞ、ノエ

とお呼びください」

王女に対しては律儀な態度を取るらしいノルイエ、ノエという騎士に、王女も顔を引き攣らせながらも笑みを向ける。

なんとというか、なんだろうこのふたり、と思う。この場の空気を、いったいどう読んでいるのだろう。そもそも騎士であるノエはともかく、皇子はまったく皇子らしくない格好だ。ノエのほうが、皇子だ、と言われて頷けてしまえる。皇子は皇族らしい派手な衣装ではなく、まったく地味な、街の青年だ。花を咲かせるような笑みがなければ、皇族だと言われても信じられない。

ここに来るまでに、いったいなにがあったのだろう。

それを訊く前に、まずはゆっくり休まれよ、という王の一言が間に入って訊けなかったが、確かにゆっくり休ませる必要があるそうだったので、その場は挨拶を交わすくらいにして王女は広間を辞した。

02 : 思いもしなかった。

シャルナユグ、シャナは考えていた。

「予算が足りないわ……」

「ええっ？ クロネイ皇子のこと考えてたんじゃないんですかっ？」

「は？ なんのこと？」

じつと見ていた書類から顔を上げて、心底驚いた顔をしている部下を見やる。

「は、って、は？ そんな憂い顔で、なんでクロネイ皇子のこと考えてないんですか。昨日ご到着したそうじゃないですか」

「……ああ、忘れていたわ」

「いつもの無駄にある記憶力はどこにいったんですか！」

「違うわよ。挨拶を忘れていたの。お疲れだと思って、今朝は遠慮しておいたのよ。今から行ってくるわ」

「え、今からっ？」

危うく本当に忘れるところだった、とシャナは書類を机に置き、くるりと踵を返して部屋を出る。部下が慌てたようにシャナを呼んでいたが、さもないことだろうから無視する。廊下に出れば、扉の前に控えていた近衛騎士が当然のように会釈し、歩き出したシャナの後ろに続く。近衛騎士にどこへ行くのかと問われたが、シャナはにやりと笑っただけにして廊下を進んだ。

しかしてその結果。

「まだ眠っておられる……?」

皇子、クロネイに宛がわれた部屋の前でシャナを出迎えたのは、律儀な皇子の騎士、ノエだ。

「体力もないくせに、二週間も歩きまわりましたからね。さすがに疲れたんでしょ」

「……歩き回った?」

ノエがぼろりとこぼしたそれに、シャナは食いつく。

帝国を出立して四日もあれば到着するセムコンシャス王国、しかし皇子は二週間もかかって到着した。

その理由を、ノエは口にしたのだ。

「ああ、王女殿下にはお話していませんでしたね。到着が遅れたのはクロ……皇子が、おれの目を盗んでは、道なき道を道として歩き回ったからですよ」

思わず、シャナは目を丸くする。

「……それは言い訳かしら?」

「ま、そうですね。事実ですけど」

「……もしかして皇子は、わたしとの婚姻がおいやなのかしら?」
「国を出られて万々歳、とかは思っていると思いますよ?」

沈黙する。

それはいったいどういことだろう。シャナとの縁談を、どうに

かして断ろうとした言い訳だろうか。いやそもそも、縁談を持ち込んだのはクロネイの祖国、トワイライ帝国のほうだ。となると、クロネイ自身が、シヤナとの婚姻をいやがったとしか思えない。

「わたしとの婚姻がいやなら、わたしはべつにかまいません。過ぎた歳ですし、もとよりその気もありませんでしたから。今回は父上……陛下の独断です。わたしが今こう言う限り、お帰りいただいてもけっこうですが」

変わった皇子だ、と思つて興味は湧いていたものの、シヤナには縁談に対する気持ちが薄い。というより、無きに等しい。いやいやながらも夫婦になるなら、友人のような関係ができれば上等だと、そんな気持ちでいたくらいだ。

だが考えてみれば、トワイライ帝国ほどの大国が、セムコンシヤス王国という小国に政略的な縁談を持ち込んだところで、利益があるのはセムコンシヤス側だ。トワイライ帝国にはなんの利益もないはじめからおかしい話だと思つてはいたが、やはりこれはおかしな話だったかと、シヤナは思った。

その、ときだ。

「シヤナの匂いが……ああ、おはよーごじやーますー」

噛みまくつた朝定番の挨拶に、正直吃驚した。気配がまるでなかったし、扉が空いた気配もなかったからだ。

「んな恰好で出てくんなよ、クロ。かつこ悪いぞ」

シヤナが吃驚していても、ノエのほうはまったくそんなことはな

く、寝間着姿のぼさぼさ頭で部屋から顔を出したクロネイに、暢気に話しかける。

「いにや、すつごくにえむくて……きづいたら、ひる？」と

「すげえ勢いで噛みまくりだな、おい。なに言ってるかもわからん」「ちよお、まって……おきるから」

「ごしごしと目を擦ったクロネイは、やはりなんというか、皇子らしくなかった。

「おはようございます、シヤナ」

完全に目が覚めたわけではなさそうな、けれども朝ならとても爽やかな笑みを、シヤナは真正面から受けた。

「お……おはようございます。もう昼ですが」

「すみません、眠り過ぎました。思った以上に疲れていたみたいですよ。柔らかい寝台なんて初めてですし、あんなに寝心地がいいとは予想外でした」

「いやはや失礼、と言いながら、クロネイはシヤナを「どうぞ」と部屋に促した。

「え？」

「すぐに、着替えます。中でお茶でもどうぞ。ノエが淹れてくれるお茶は意外と美味しいですよ」

「いやそんな、いくら婚姻が決まっているとはいえ、部屋を別々にされている以上、正式に夫婦となるその日までは挨拶程度のものしか交わすことは許されないものだ。セムコンシヤス王国では、それ

が婚前の数日間とされ、外出が制限される。だからシヤナは儀式的に挨拶に伺ったわけだが、クロネイはそんなシヤナの返事を訊くことなく部屋に戻っていく。

シヤナは、ちらりとノエを窺った。

「こちらの通過儀礼はご存知？」

「一応、教えましたけど」

「……知識としてはあるのね」

「クロには関係ないですね」

「どういふことよ」

「昔からああですから」

つまり人の話を聞いているようで聞いていない。また、聞いていないように聞いている。そういうことだ。

「変な皇子……」

思わずそうこぼすと、ノエは苦笑した。

「いろいろあるんですよ」

そう言いながら、ノエも慣習をわかっていながらシヤナを部屋に促した。ここで断るのもどうかと思い、シヤナは近衛騎士を伴って部屋にお邪魔する。

中央の長椅子に腰かけ、ノエのお茶をいただくとすぐ、クロネイは続き間の寝室から出てきた。瞬間的に瞠目してしまうのは、これはもう仕方ない。

「待たせてすみません。急いで用意したので、これしか着るものがなくて……どこかおかしいですか？」

昨日もさつきも、まったく皇子らしくなかったクロネイだが、着るものが変わると雰囲気までがらりと一変する。整えられた髪は、昨日までは薄汚れていたのか灰色に見えたが、実は銀髪であったらしい。夕焼け色の双眸は、寝起きのせいか少し潤んでいて、頼りない。それを包むように白い礼装が、漸くクロネイを皇子らしく見せている。

しかし、その白い礼装は、神官のものだ。

「神官でしたの？」

「え？ あ、違います。なにか着るものはないかとお願いしたら、急なことでこれしかないと言われまして」

それを甘んじて着ているわけか、と思うと、本当に皇子なのか疑いたくなる。そもそも、着るものをお願いするとは、どういうことだ。

「そういえば荷物が……帝国から多少は届いていましたが」

「ああ、それはおれのではないですよ。おれのは、昨日持っていたものがすべてですから」

確かに、皇子の私物と思われるものは、トワイライ帝国から届いていない。婚姻に伴って必要になる最小限のものしか、送られてきていない。

しかしながら。

「昨日の……あれがすべて？」

身一つのように思えたのだが、と首を傾げたら、クロネイは苦笑

した。

「あちこち歩き回るには、路銀が必要でしょう？ 換金しながら歩いたので、荷はほとんど無くなってしまいました」

あはは、と笑う神経が知れない。

この大国の皇子は、本当に歩きでこの国までやってきたらしい。

「車はいかがされたのです」

「途中で換金しました。いい値で売れましたよ」

がく、と肩が落ちる。車まで換金したらしい。それも、ここに来るまでに二週間は経過しているわけだから、おそらく出発したその日に売ったと思われる。

なんて皇子だ。

「あなた、本当に皇子なの？」

うつかりそう訊いてしまったが、クロネイはただ柔らかく笑んだ。

「たぶん」

しかも曖昧な答えを返された。

「とりあえず、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライという名は、おれが持つ唯一の名ですよ」

偽名ではないし、偽者でもないと、クロネインは言う。

「ああ、もう少ししたら、クロネイ・エイブン・セムコンシャスで

すね」

などと、暢気にも言う。

「この皇子は、その名が本物である限り、確かに大国の皇子だ。」

「……わたしと婚姻する気があるの?」

「ああそれ、いいですね」

「はい?」

「おれに敬語は要りません」

「それならあなたも……」

「いえ、おれはシャナの地盤になるために、ここへ来たんです」

ふとシャナは、口を嚙む。

シャナの地盤になるために、などと言う男は、初めてだった。口説く文句としては、一流かもしれない。この国では、いくらシャナが優秀でも、女だからという理由で卑下する者が、少なからず存在しているのだ。

シャナが言葉を失っていると、クロネイはさらに笑みを深めて言った。

「シャナという花を、明日に、繋げるために」

ただただ、優しい笑み。

そして力強い笑み。

「おれをあなたの婿にしてください、シャナ」

こんなところで、こんなふうに、求婚されるとは思いもしなかった。

どうやら神官服がお気に召したらしいシャナの婿どのは、荷を売り払ってしまったせいで着るものがない婿のためにシャナが急きよ用意させた礼装より、好んで神官服を着て歩いている。おまけに、そちらの方面にでも力を入れるつもりなのか、神学まで学び始め、一日の大半を神殿で過ごすようになっていた。

そしてなぜか日課となっているのが、シャナとのお茶会である。

「地の女神、天の大神……アヌ神とラグナ神は、親子なんですよね」

この日も神官服を着たクロネイは、子ども向けの絵本の形式を取っている聖典を手に、にこにここと笑ってお茶をしている。

「なんだか嬉しそうね」

「祖国では学ばませんでしたから、いろいろと楽しいです」

「学ぶことが？」

「ええ」

聞いた話によると、クロネイはものすごい勢いで神学を吸収しているらしい。到着からわずか五日で、聖典の半分を暗誦できるくらいまでになったとか。しかも古文のほうで、だそうである。

「まあ神学は、狭き門でもあるから……難しいかもしれないわね」

「シヤナは信仰しないのですか？ あ、王族の方に失礼なことでしたね」

「かまわないわ。そうね……人より薄いかもしれないわ。道は己れ切り開くもの、神を頼ってばかりもいられない。そう思うから」
「さすがシヤナ」

にこ、と笑みを深めたクロネイは、シヤナの素直な本音に文句を言うこともなければ、王族のくせになんたる不信心、と罵ることもない。

セムコンシヤス王国の信仰は、地の女神アヌと、天の大神ラグナの二神を信仰している。この大陸を作りたもうた神として、クロネイの祖国トワイライ帝国でも信仰されている。つまり一般的な宗教で、信仰者が多い。それでも、神学という学問にしまうと、そこは狭き門である。戒律が厳しいからだとされているが、本当のところは、神の声を聞くことができなければ神官にもなれないからだ。それでも人々は、たとえ声を拝聴できなくとも、二神を信仰する。

宗教とは人の想いの集合体であり、心の支えであり、拠り所であるものだと、シヤナはそう思うから信仰心が人より薄いのかもしれない。

「あなたは神を信じるの？」

「半分は」

「半分？」

「この大陸を作りたもうた神、なのでしょ？ 大陸の歴史は、人々の歴史より長くて、さすがに根源がわかりませんからね」

なるほど、クロネイは原点的な部分で神の存在を信じているらしい。

「そうね……わたしも大陸の歴史は、わからないわ」

「それこそ、神のみぞ知る、ことでしょうか？」

「その通りだわ」

「人の歴史は、遺跡やそれらにまつわるものを調べればわかります。土を見て、層を見て大陸のことを知ることはできるでしょうが、それは大陸の年齢みたいなものでしょう？ しかもその年齢すら、知るには限界がある。土を掘り続けることなんて、できませんからね」

言うことは的を射ている、と思う。

確かに、と頷いて、シヤナはクロネイの手許に視線を移した。

「聖典を暗誦できると、伺ったけれど」

「ああ、これですか？ 絵が綺麗で、気に入ってしまいました」

「そう……将来は神官の道に進むつもり？」

「シヤナの地盤になるには、必要なことでしょうか？」

神官の資格は取るつもりでいる、らしい。資格とは、もうすでにクロネイは達成しているようなものだが、聖典を暗誦していることを前提とし、神の声を聞けることだ。

「……あなたは聞こえるの？」

「聞こえる？ なにがです？」

「声が」

聞こえなければ神官になることはできない。今こうしてクロネイが神学を学んでいるのは、シヤナの夫となることが確定し、王族として扱われているからだ。

「おれに天恵はありませんよ」

はは、と笑って答えたクロネイに、少しだけ、目を見開いた。

天恵とは、授かった者の多くが精霊と契約することにより、その属性の力を使うことができるものの、総称である。水の天恵を授かれば、水精霊と契約することでその属性の力が使え、風の天恵を授かれば、風精霊と契約することでその属性の力を使えるようになる。天恵を授かった者の多くは、いやほとんどは、精霊と契約し、天恵術師と呼ばれていた。

そして、授かる天恵は一つだけであるから、精霊と契約し力を揮うことができても、一つの属性しか扱えない。

だが、それらの法則から外れた天恵者が、いないわけではない。稀に、二つの属性天恵を授かり、精霊がふたり、扱える力も二つという天恵術師がいる。ふつうの天恵者の一割にも満たない人数だが、確かに存在している。

さらには、そこからもっと外れた天恵者も、いないわけではない。たとえば、神官の天恵。セムコンシヤス王国では、神の声を聞くことができる者を、神官と呼ぶ。トワイライ帝国でも、神官は神の声を聞くことができる者のことだ。神官は精霊と契約しない。精霊と契約しなくとも、天恵を使えるからである。

つまるところ、精霊と契約しない、特定の天恵を授けられる場合がある、ということである。

クロネイは神官の資格を取るつもりでいるようだが、必要とされるその特定の天恵、神の声を聞く力がなければ、神官の資格は得られない。

「神のお声を拝聴できないのに、神官に？」

「え？ ああ、そういう意味ではないです。天恵はありませんって、それだけですよ」

「だから、神官には天恵が必要なのよ。お声を拝聴できる、天恵が知らないのだろうかと教えれば、クロネイは予想通り、吃驚したような顔をした。」

「え、そうなんですか？」

「本当のところはわからないけれど、その天恵がなければ神官にはなれないと、わたしは聞いたわ」

「……あれ？ そうなんですか？」

「やたらと首を傾げるクロネイに、シャナのほうも首を傾げたくなくなる。」

「なにを疑う、いや、確認しようとしているのだろう。」

「天恵がないと、神官にはなれないわよ」

「確かにおれは天恵を授かっていませんが……あれ？」

「なに？ なにが疑問なの？」

「シャナの話ですと、神の声を聞く力が、神官に必要な天恵だと、そういうことになりますよね？」

「そうよ」

「あれ？」

「なにやら考え込むように首を傾げたクロネイは、ふとシャナに断りを入れ、席を立った。露台でお茶をしていたのだが、そこから部屋の中へ入ることはなく、露台の前に広がる庭でシャナとクロネイを護衛するノエを呼び、欄干に手をつく。」

「ノエ！ ノルイエ！ ちょっと」

「ああ？ 姫とのお茶を邪魔すんなって言ったの、あんだだろうが」

そんなことを言っていたのか、と思いながら、怪訝そうに近づいてきたノエをシャナも見やる。

「おれ、神官になれないみたいなんだけど」

「は？ なに、あんた神官目指すのかよ、今度は」

「必要だろ」

「はあ。まあ、あんたならなれるんじゃないやね。あれだけ気に入られていれば」

「でも、おれ、天恵ない」

「なんで天恵が関係あるんだよ」

「神官は、神の声を聞く天恵が必要だそうだ」

「……ん？ あんたいつのまに天恵者になった？」

「やっぱりそうなる？」

ノエとの会話では、クロネイもやはり敬語が出ないらしい。ノエが敬語でないのは首を傾げたくなることだが、シャナが気になったのはふたりのそればかりではなかった。

「そのお話、どういうこと？」

と、思わずふたりの会話に参加してしまう。

「天恵者になった、というのは、どういう意味？」

問うたシャナに、答えたのは怪訝そうな顔をしたままのノエだ。

「そのままですよ。クロに天恵はありません。けど、神官に必要な天恵が神の声を聞けることってのは、おれらにしてみたら変な話です」

「え？」

さっぱり意味がわからなかった。

「クロは、神にめっちゃくちや気に入られてますよ。アヌ神とラグナ神ではありませんが」

「……、はい？」

どういうことだそれは、とシヤナは瞠目する。

「おいクロ、呼べるか？」

「ん？ うん、たぶん」

呼べる、と突拍子もない発言をしたクロネイは、ふと空を仰いだ。

「ミスト」

それは呼ぶというよりも、囁きかけているように、声を風に乗せていた。

そうして。

「びつくりだよ、クロ。呼ばれたのも吃驚だけど、なんでアヌの故郷にいるの」

と、空から人が降ってきた。しかも、その人の背には、白い羽が生えていた。

はあ、と王女シャルナユグは憂い顔でため息をつく。誰もが目を奪われるその姿に、しかし困ったようにクロネイが苦笑している。

「あの、シャナ？」

遠慮がちにかけられた声に、シャナはどうにか気を取り直して顔を上げる。

「今のお方が、風の神である？」

「ミストです。風と水を司る神だと、自分で言っていました」

先ほどまでのことを思い出すと、またため息がこぼれる。

「ああ、そんなにため息をついたら、せっかくの幸せが……」

クロネイの心配に、今はそれどころではないと、気が滅入る。

シャナの話に疑問を持った騎士ノエが、クロネイに「呼べるか」と問うて呼び出したのは、風と水を司るといふ神、風水神ミストだった。お伽噺のような神の存在を、そんなにも簡単に、あっさりと呼び出されて、平然としていられるわけがない。

神の声を聞いたこともなければ、姿を見たこともないシャナには、かなり衝撃的なことだった。

「この衝撃をどうしたらいいのかしら……」

「そんなに驚かせてしまいましたか？」

「神という存在を信じていないわけではないけれど、いきなり目の前に現われたお方に対して、わたしに驚くなと？」

「ああ……そうですよ、すみません。ミストはおれの友人みたいなもので、昔からああやって突然現われるもので」

突然なにかしらの気配が現われることに、驚くことがあまりないのだと、クロネイは暢気にも笑う。そういえば、クロネイも気配なく動くようなところがある。ノエはそれに驚くことがない。彼らは本当に慣れているのだろう。

「それにしても……本当にあのお方は、神であられると？」

「自分でそうだと言っていましたから、そうだと思いますよ」

「……翼のある人間など、いませんからね」

突然現われた翼のある神は、来たかと思えばすぐにどこかへ飛んで行ってしまった。

『アヌの故郷かあ……久しぶりだからちよつと遊んでくるね』

と、神というには軽い調子で、飛んで消えたのである。

シヤナが知る神話の風水神は、確かに翼のある神であったから、調子が軽くともあれは神なのかもしれない。

「なぜ……なぜ、風の神があなたの呼びかけに、応えるの？」

「呼んだのは今回が初めてですよ」

「え？」

「ここでは、という意味ですよ、もちろん。シヤナもご存知のとおり、帝国もセムコンシヤス王国も、アヌ神とラグナ神を信仰しますでしょう？ ミストは、ごく一部の限られた土地で信仰される神で、この地には縁もゆかりもありません。が、呼んでみたら来てくれた

ので……どうやらアヌ神とお知り合いのようですね」

「シャナが訊きたかったのはそういうことではないのだが、クロネイが言うことは間違っていない。風水神は、この地では信仰されていない神だ。」

「おれがいたのが、そのごく一部の土地でしたから、まあそこで知り合ったといえますか……気に入られたといえますか」

「……あなた、なに者？」

「いったいクロネイは、なにがどうあって、神と知り合いなどという間柄になったのか。天恵者ではないというのは、これでは嘘になる。神の声を、直接に逢って聞くことができるのだ。」

クロネイは、にこりと微笑んだ。

「おれは、シャナの婿ですよ」

銀の髪が、さらりと風に流される。それはきらきらと光っていて、シャナは眩しさに目を細めた。

「なぜ笑うの？」

「シャナが好きだなと、思うからです」

「……そんなこと、軽々しく言うものではないわ」

なんなのだろう、この皇子は。

神と知り合いだというくせに、その天恵はなく、しかし恩寵を受け、それがさもふつうだとばかりの態度を取る。平然とシャナに求婚し、婿だと言い、好きだなどと言う。

ここへ来るまでに二週間もの時間をかけ、まるで逃亡しているかのように、遅れて現われたくせに。

なんだか不愉快だ。

シヤナは、国のためと思って大国の皇子との縁談を受け入れはしたものの、気持ちはそれに追いついていない部分がある。クロネイのような皇子でなければ、到着したその日に追い出してやっていたところだ。シヤナは婚姻など、受け入れたくもない。

「わたしと出逢ったのは、つい最近のことでしょうに……っ」

「……時間が必要なのですか？」

「わたしは断ったはずよ！ 皇子を婿に迎えるつもりはないと……今後、誰とも婚姻しないと！」

「知っていますよ」

だからなんだ、とばかりにクロネイが苦笑する。

不愉快でならない。

なぜ、クロネイは笑うのだろう。

なぜ笑えるのだろう。

シヤナは受け入れないと、そう言っているのに。

「もういいわ……っ」

儀式的にクロネイとの面会はしていたものの、それも今日までにしようとして、シヤナはお茶の席を立った。

望んで受け入れた縁談でもない、クロネイとは友人のような関係が築けられたらいい、その思いは変わらない。クロネイがなに者であろうと、それはシヤナには関係ないことだ。神と知り合いだろうがなんだろうが、天恵があるうがなかるうが、シヤナが気にかける必要はない。

それを。

「シヤナ」

クロネイが、止める。手を取られ、近くに引き寄せられた。

「なにをするの……っ」

「シャルナユグ」

引き寄せられた先には、クロネイの玲瓏な顔がある。まるで、ひとり腹を立てているシヤナを宥めるかのような、そんな微笑みにシヤナは不覚にも囚われてしまう。

「おれを受け入れられなくても、おれは、シヤナの婿です」

「そん……なこと、わかっているわ」

「シャルナユグ」

「なによ」

真摯な双眸が、じっと、シヤナを見つめてくる。あまりの真っ直ぐな瞳に、シヤナはいたたまれなくなつて視線を反らした。

「シヤナ、あなたがおれを受け入れられないのも、わかります。おれのような人間が、皇子だとは思えませんものね。それでもおれは、あなたの婿になりたいです」

「そんなに繰り返し返さなくても、この縁談はもう白紙にはできないわ。わかっているわよ」

「……ごめんなさい」

「？ なぜあなたが謝るのよ」

視線をクロネイに戻したら、なんだか泣き出しそうな顔をしたクロネイが、それでも笑おうとしていた。

この皇子は表情が豊かだ。感情の一つ一つに表情があつて、さま

ざまな顔を見せる。それでも、その夕焼け色の双眸だけは、いつもどこか暗い。

「おれみたいなのが、あなたの婿になろうなど、無礼だと承知しています……それでも……それでもおれは、シヤナの地盤で在りたい。だからシヤナ、おれがあなたの後ろにいることを、許してください」
「……許すもなにも……わたしに対して無礼とはなに？ わたしは確かに王女よ。けれど、わたしの国はあなたの国には及ばぬ小さな国。無礼と言うなら、わたしのほうよ」

許しを請うたクロネイに言い返すと、泣きそうな顔をしながら笑おうとしていたクロネイが、本当に無理やり笑った。

なにもそんなに無理をして笑うことはないのに、なにが彼をそうさせているのか、不思議でならない。

「あなたの婿に選ばれて、おれは幸せですよ」
「……幸せ？」

「こんなおばさんを娶ることの、どこが幸せだというのか。花盛りも過ぎ、あとはただ緩やかに老いていくこの身は、シヤナよりも若いクロネイには不相応だ。

シヤナは望んでいない、それなのにクロネイは望んでいる、その関係にシヤナは眉をひそめた。

「わたしはあなたより、十も歳上なのよ」
「九つですよ」

「適齢期も過ぎた、おばさんなのよ」
「素敵なご令嬢ですよ」

「あなたを幸せになんてできないわ」
「幸せですよ、おれは、充分に」

クロネイがわからない。

ノエは言っていた。国を出られて万々歳、と思うくらいには、この縁談をクロネイが受け入れていると。果たしてそれは、どういう意味だったのか。幸せだと言うその口で、本当はなにをどう思っているのか。

「……式までにもう時間がないわ。帰るなら今よ」
「いやですよ」

帰らない、と言ったクロネイは、それまで掴んでいたシヤナの手を離し、帰るものかと言わんばかりに身を引く。拗ねたような顔までして、そっぽを向いた。

「……帰る場所なんて、おれにはない」
「え……?」

ひらりと身を舞わせて欄干を超えたクロネイは、帰る場所がないという言葉に少し驚いたシヤナを振り返ると、「帰らないから」と繰り返して、そのあとすぐ庭を走り抜けていった。

「あー……あほめ」

ノエはクロネイを追いかけることなく、呆れた顔で見送っている。

「姫」

と、ノエがシヤナを呼ぶ。

「あいつ、わりと素直なんで、だいじょうぶですよ」

笑ったノエは、シャナの不安を和らげるようにそう言って、漸くクロネイを追いかけて走り去った。

「帰る場所がないって……どういうことよ」「

最後にそんな大きな疑問を残していくなんで、胸中がもやもやする。

あの皇子は、いったいシャナを、どうしてこつも振り回すのか。

「もつ……つ」「

ちょっとした苛立ちに、シャナは拳を握って欄干を叩いた。手が、ただ痛むだけだった。

喧嘩、のようなものを、したと思った。

けれどもそれは、シャナの一方的な感情であつたらしい。

クロネイは、「帰らない」と言つてシャナとお茶の席を離れたが、翌日も同じようにシャナのところに来て、お茶に誘つてきた。その翌日も、そのまた翌日も、シャナが戸惑うのをよそに、クロネイはやって来た。ただ、「帰るなら今よ」と言つたシャナのそれには反抗心があるらしく、ずっと拗ねたような顔をしている。ノエが「わりと素直なんで」と言つた通りの、正直な反応だ。

そしてこの日も、クロネイはシャナのところにやって来る。やはり神官服姿で。

「シャナ、シャナ、休憩でしょう？ 休憩しましょう。お茶にしましょう」

懲りずに来たか、と思つてしまうのは、シャナが喧嘩のようなものをしたと思つていたからだ。

「殿下、皇子も来たことですし、休憩にしましょう」

「今日は無理よ。わかつているでしょう？ 皇子、今日は忙しいの、明日にしてくれるかしら」

シャナは書類から顔を上げることなく、部屋に顔を覗かせていた

クロネイに、素っ気ない態度を取る。部下たちがはらはらとしていたが、かまっていられない。今日は忙しいのだ。夕方に貴族院の会議が控えているため、城には貴族や各領地の領主が集まりつつあり、シヤナも議題になるであろうことをまとめて考えておかなければならない。

「少しくらい休まないと……それに、議会は明日もあるでしょう。しかも夜会もありますよ」

「ああ、そうだったわね。礼装は手配したわ。袖を通して、身体に合わせて確認してちょうだい」

「済ませました。ぴったりでした。さすがシヤナです」

「そう。なら、あとはおとなしく部屋にいなさい。明日の夜会は、臣下にあなたをお披露目するという口上もあるの。うるちよろしいで」

部屋にいたくないなら神殿でもいい、とシヤナはクロネイをばっさり無視する。なにか言ってくるかと思ったが、それもなくて静かで沈黙が続いた。静か過ぎるなと思ってふと書類から顔を上げたら、いきなり背後に人の気配がする。

「それなら、ここにいますね」

吃驚だ。どうしてこう、気配なく動くのか。

「ちょ……部屋か神殿にいなさい。わたしは忙しいのよ」

部下が用意したのか、クロネイは椅子を運んで、シヤナの後ろにちょこんと置いて座っていた。

「邪魔はしません。いるだけです」

「皇子……」

「ああそれと、おれはクロネイです。クロネがいやなら、ノエのよ
うにクロでもいいです。犬みたいでイヤですが」

「……呼んで欲しいなら、その敬語はやめて」

「え」

そう切り返されるとは思わなかった、とばかりにクロネイ、改め、
クロは目を真ん丸にした。それは思った以上にクロを子どもっぽく
見せ、可愛らしくした。

「敬語をやめたら、本当に呼んでくれるのですか？」

「やめたら、ね」

「わかりました、やめます。クロネって呼んで、シヤナ」

「え」

今度はシヤナが目を丸くする番だった。そんなにあっさり敬語を
やめるとは思わなかったのだ。

「最初にやめてと言ったときは、いやがったくせに……」

「それはそれ、これはこれ。やめれば呼んでくれるなら、やめるよ」

ああ、素直だ。まさに素直だ。ノエの言うとおりだ。

「シヤナ、クロネだよ、クロネ。はい、呼んで」

うきうきと、目を輝かせるクロに、シヤナはたじろぐ。確かにこ
の先ずつと「皇子」と呼ぶわけにもいかない、それはわかってい
ることだが。

「く……クロ」

呼ぶならそつちのほう可愛い、と思っていたことは内緒にして、シヤナは顔を引き攣らせながら口にする。
すると、とんでもないものが待ち受けていた。

「しゃ……しゃな」

ぶわりと、全身から花を咲かせたクロが、夕焼け色の双眸をきらきらと光らせて満面に笑みを浮かべていた。随分な感激の仕方だ。名を呼ばれることが、だいぶ嬉しいらしい。

眼の端に移る部下たちが、そんなクロを見て目許を手巾で拭いているように見えるのは、気のせいだろうか。いやはやよございましてね、皇子、などという眩きも、幻聴だろうか。

ハツとする。

話が反れた。

「へ、部屋に戻んなさいっ」

「やだ」

「く……っ」

不覚にも、可愛いと思ってしまった。

「わ、わたしは忙しいのよ。そこにいられると集中できないの、邪魔なの、だから戻りなさい」

「邪魔はしない。ここがいやなら、露台にいるから」

どうしてもシヤナとお茶がしたい、或いはそばにいたいらしく、後ろのほう駄目なら露台のほうに移動すると、クロは粘ってきた。

「皇子……」

「クロ、だ。クロネがいいけど」

「……もう一度呼ばれたかったら、部屋に戻りなさい」

「え」

それはひどい、という顔をされる。本当に表情が豊かな皇子だ。

「殿下、少しくらいいいじゃないですか。殿下も皇子も、一日に逢う時間はこの休憩のときだけなんですし」

擁護してきた部下に、クロの目が輝く。それはあまりにも眩しい。絆されるものかと思っただが、見つめられるとどうも、なにか言うたびにシヤナが虐めているような気がしてくるから不思議だ。

シヤナは深々とため息をついた。

「ああ、そんなにため息をついたら幸せが……」

「皇子」

「クロだよ」

名を呼ばれたいしそばにもいたい、それがありありと伝わってくる。

けつきよくシヤナは、「少しだけよ」とクロの滞在を許した。クロだけではなく部下までそれを喜んで、休憩しないつもりが、お茶を飲みながらの仕事、になっちゃった。

「進まないわ……議会で変な発言したらどうしてくれるの」

「シヤナならだいじょうぶ」

「その確信はどこからくるのよ」

「いつもかつこいいから」

「……かつこいい？」

「凜としていて、清々しくて……羨ましいくらいだよ」

椅子に深く腰掛け、背もたれに身体を預けたクロが、柔らかな笑みを浮かべながらシャナを褒める。シャナには、その余裕こそが羨ましく感じられた。これで自分より歳下だなんて、正直驚かせられる。

「……あなたも参加する？」

「おれ？ 無理むり、おれは国政向きの頭でないから。シャナが戻ってくるのを待っているよ」

敬語をやめたクロは、歳相応というよりも、少しおとなに見えた。敬語のままであったほうが、よほど子どもっぽく見える。なんだか、すぐに追いつかれそうだ。歳上の威厳というものも、掻っ攫われそうに思う。

「……クロ」

「ん？」

「わたしはあなたより歳上だけれど、だからといって、わたしに追いつこうなんて思わなくていいのよ」

無理をしてまで、早く成長しようなどと、思って欲しくない。今このとき、一瞬一瞬を大切にしたい。

本心からそう思って口にする、クロは唇を歪めた。

「おれはもう成人したよ」

「そうね……それでも、わたしから見たら、あなたはまだ子どもよ」「成人した」

「わたしが成人したのは、あなたとの歳の差の年数分、前のことよ」
ムツと、クロが不機嫌そうな顔をする。

「……シヤナは、おれが歳下なのが、いやなの？」

「違うわ。今このとき、一瞬一瞬を、大切にして欲しいのよ」

「なら、おれもそれをシヤナに言うよ。シヤナも、今を大切にして欲しい」

椅子を離れたクロが、ゆっくりとシヤナのそばまで歩み寄ってきて、すぐ近くで跪いた。

「おれに今を大切にして欲しいと言うなら」

シヤナの手を、クロはそっと、握ってくる。

「シャルナユグ」

なぜだろう。見上げてくるクロに、心が反応した。

「おれと一緒に歩む未来も、大切にしてくれないか」

それは、まるで二度めの、求婚に聞こえた。

礼装効果が、遺憾なく発揮されていると思う。

シヤナが見立てたクロの礼装の色は白、装飾も少なくし、質素に仕立てていた。

それを当人に着せてみると、外見だけはちゃんと皇子に見える。

「確かに皇子ね」

「え。おれ、疑われたままなの？」

「ふだんがらしくないからよ」

「あー……ごめんなさい？」

「その口は、らしくないままね」

「敬語をやめると言ったのはシヤナでしょうに」

「そこまで崩れているとは知らなくて」

「見本があれだから、仕方ないよ」

あれ、と言われた見本は、飄々としているノエだ。どうやらノエは、近衛騎士兼お幼馴染であるらしい。

「おれのせいにすんなよ」

「ノエのせいだよ。おれのこと皇子扱いしないし」

「それはあなたの気質がそうだからだろうが」

「う……」

仲がいいとは常々思っていたが、本当に仲がいい。ノエの口調が

クロに対して皇子扱いでないのは、幼い頃からずっと一緒にいるからだろう。

「皇子らしくないのは、昔からのね」

「そう言うけど、なら皇子らしいって、なに？」

「そうね……まず神官服は着ないと思うわ。もっと派手な衣装で、傲慢で、高慢でしょうね」

「……シヤナは、おれにそうあって欲しいの？」

「いいえ」

そんな王子を見たことがあるから警えにしたのだが、シヤナとしては真つ向からお断りである。

「皇子らしいってなんだろう……んー」

「逆に訊くけれど、どうしてそれを悩むのかしら？」

「シヤナは、おれが何番めに産まれたか、知ってる？」

「皇子としては第三、だったかしら？」

「母親が正妃だから皇子としては第三だけどね、上から数えるとおれ、十番めくらいなんだ。そこまでくるとね、もうほとんど放置なんだよ。テキトーに生きる？ みたいなの？」

「ええ？」

まさか、と思ったが、本当のことらしい。ノエまで頷いている。

ふつつなら、なにが起こるからわからないからと、不謹慎なことではあるが、皇子も皇女も関係なく平等に教育されるものだ。しかしクロには、その平等が行き渡らなかつたという。

「もう誰が姉上で誰が兄上なのかもわからないんだよ。どこかに嫁いだり、婿に行ったりで、一番上の兄以外もういないから」

「わからないものなの？」

「そもそも、本当におれが陛下と妃殿下の息子なのかも、不明だしね？」

「えっ？」

「って、それは冗談。おれ、妃殿下の若い頃にそっくりらしいし、性格も陛下に似てるらしいから。これはお墨つき。安心して」

驚かせないで欲しい。ただでさえ臣下たちがクロの素性を改めている最中であるのに、そんなことを言われたら大変なことになる。

「びつくりさせないで。わかっているでしょう？ あなたのことを

疑っている貴族は、まだいるのよ？」

「たとえばファルム侯爵？」

「知ってるの？」

「シヤナのおじいさんだよ。到着したその日に、挨拶に行ったよ」

いつのまに行動していたのか。確かにファルム侯爵は、シヤナの母、王妃の父で、シヤナにとって祖父にあたる。これがなかなかの堅物で有名だ。

「これが大変だったよ。おまえのような人間は知らん、の一点張り……名乗ったんだけど、恰好が恰好だったから逢ってくれなくて。

どうしようかなあと考えていたら、おれってば一時間以上そこに突っ立ってたみたいだね。邪魔だつて追い出されるかと思ったら、恰好をどうにかできれば逢えるかもしれないよって、親切にも教えてくれた人がいたんだ。そこでなにか着るものありませんかってお願いしたら、これに着替えるって、神官服くれたの。で、着替えたら逢ってくれたんだよ」

「いつ逢いに行ったのよ？」

「ん、シヤナに逢ってすぐ。ほかに、有名どころには挨拶に回って歩いたよ」

その辺はばつちりです、とクロはニツと笑う。思わず顔が引き攣った。やるべきことはとうに済ませていたらしい。

そして、好んで着用していると思われる神官服は、ファルム侯爵からいただいたものだから、という理由で律儀にも袖を通し続けていたようだ。

「シヤナからもらった衣装は、部屋にいたときに着てた。だってシヤナからだし？」

「恥ずかしいから言わないでくれる？」

「これを自慢しないでどうするの？」

「誰に自慢するのよ？」

「国民みんな」

「やめて」

「今日の衣装もシヤナがくれたもの」

「やめて！」

そもそも着替えすら売り払って路銀にしたクロが悪い。

まったく、シヤナの婿どのは、たまにものすごいおとなびて見えるのに、子どもっぽいところもあって大いに振り回してくれる。

「婚礼衣装も楽しみだな。シヤナが見立ててくれるんだよね？」

「仕方ないでしょ。あなた、婿なんだから」

「ねえシヤナ、おれ、かっこいい？」

「……、は？」

「ほら、シヤナが見立てて用意してくれたこの衣装、どうよ？」

歳下だからか、それとも兄弟が多いクロだからか、歳上が思わず歳下を可愛いと思うその仕草をよくわかっているような気がするの
は、シヤナの気のせいだろうか。

「珍しく皇子らしく見えるわ」

「それひどいな」

「事実よ」

「ふだんはどう見えてるんだよ……」

クロの玲瓏な容姿は、そうでなくとも人目を惹く。銀の髪、夕焼け色の双眸など、この国にはいないのだ。綺麗だと、思うことはシヤナでもしばしばある。

そこに可愛いが加味されるから、シヤナは困っている。

クロに、本当に慕われていると、勘違いしそうになるから。

自分が愛されようとしていると、思ってしまうから。

「シヤナ？」

「……なんでもないわ。ジーン、わたしも着替えるから、お願い」

「おれも手伝う」

「やめて」

「ひどい、即答だ」

「当たり前よ」

ばかなこと言わないで、とクロに背を向け、侍女のジーンを呼ぶとシヤナは寝室に入る。そう、クロはなぜかシヤナの部屋にいて、侍女や侍従をにこにこさせている。もともと衣裳部屋が寝室のほうに隣接しているので着替えに不便はないが、クロがいるといたいのとは、心持ちが変わる。そもそも、セムコンシヤス王国の慣習を無視してくれているクロは、いつでもシヤナを驚かせるわけだが。

「シヤナ」

「きゃあ！」

「え、もう着替え終わったよね？」

ちようど着替えを終え、そう長く伸ばしてもいない髪をジーンに結び上げてもらっている最中に、クロは突然と寝室に顔を出してシヤナを驚かせた。

「婚礼もまだの間で、簡単に入ってこないで」

「いいじゃないの。おれとシヤナの仲だろ」

「どんな仲よ。そもそも、本当なら部屋に入ること厳禁なのよ？ それ以上は入ってこないでちょうだい」

「それは残念。けど、ここまで来たし、せつかくだからいいでしょ」「なにがっ？」

ふつと笑ったクロが、しっかりと寝室に入ってくる。もちろん扉は開いているし、閉まらないようにノエが扉を押さえている。

「髪、結わせて？」

「え？」

「触りたかったんだ。シヤナの髪、綺麗だから」

そう言って、クロは戸惑うジーンから櫛を受け取ると、勝手にシヤナの髪に触れた。

「わあ、柔らかい。金って、硬いかと思ったんだけど」

「ちよ、え、クロ？ ジーン、なにをさせているの？」

「おれの髪は硬いんだよ。癖もなくて、面白味もない。けど、シヤナの髪は柔らかくて、優しいな」

鏡越しに、クロの満面笑顔、幻覚であろう花が見えた。嬉しいと

きの表情はいつもこれだ。

「シャナ、シャナもおれの髪、結えてよ。シャナとお揃いになる飾り、つけたいから」

「え？ 飾りって、女ものよ？」

「うん。ほら、まるでおれがシャナのものっていう感じがするじゃない？ やって、シャナ」

嬉しそうにシャナの髪を梳きながら、クロは器用にも少しずつ編み込みなどを入れ、シャナの淡い金色の髪を一つにまとめていく。その手つきは繊細で、横ではらはらと見守っていたジーンでさえも、徐々に感心の眼にさせていく。

「う、上手いです……わたし侍女なのに、ま、負け……」

「ジーンはシャナの特徴を捉えた結え方、上手いよね。でもほら、こうすると背がすごく綺麗に映えると思わない？」

「あ、はい。そうですね、もうちょっとこうしたら……」

「さすがジーン！ これで紗を巻いてもらうっていつのはどう？」

「いいですね！ わたし、用意してきます」

「できれば白で」

「わかりました！」

ジーンの腕前を落ち込ませることもなく、クロは仕上げた。いつもより首許が頼りなくて違和感が残るものの、鏡越しに見えるクロは満足げで、思わずシャナも口許を緩めてしまう。

「うん、いい感じ。これで紗を首に巻いて、隠してもらって、完成」

「……あなた、侍女になれるわよ」

「いやだな。おれは男だから、侍従だよ」

失礼なことを言ったつもりだったが、それはクロには効かないらしい。罵られても貶されても、この皇子なら笑って流してしまえそうさ。

「……いいわ。ここに座って、クロ。あなたの髪も結えてあげる」
「本当？　ありがとう、シャナ」

見立てるのは礼装だけで、そのほかには手を出すつもりはなかったのだが、なんの作戦かクロは銀の髪をまったく弄っていないから、シャナは苦笑するとクロの髪に手を伸ばした。

クロの髪は、本人が言っていたように硬く、すんと真っ直ぐだ。ふわふわ跳ねるシャナの金の髪とは違う。少し羨ましい髪質だ。

「これ、つけてね。お揃いになるから」

本来ならシャナの髪につけられるはずであった対の髪飾りは、一つを残してシャナの髪につけられたようだ。もう一つを、クロが差し出してくる。結えたところに差し込む形となるそれは、白い羽と黒い羽が一つずつ、小さな丸い水晶に添えられた飾りだ。

「高い位置に結えるから、少し髪を引つ張るわよ」
「どうぞ」

シャナはクロのような技術はないので、申し訳ないがさつと一つにまとめていく。後ろ髪は残して上だけを一つに結え、そこに髪飾りを差し込んで終わりだ。

揃って髪を結えたところで、クロに頼まれて紗を取りに行っていたジーンが戻ってくる。

「殿下、これを首に。それから皇子も」

「これまでお揃い？ 気が効くね、ジーン」

紗は、シャナの露出した首を隠し、クロの襟を飾る。

準備がすべて整ったところで、ふたりで鏡の前に立った。

腰に腕を回されたので、軽く叩いて牽制する。けれどもクロはめげなくて、腰に手を添えられてしまった。

「ちょっと……」

「いいでしょ」

にこにここと笑うクロは、どこからどう見ても、嬉しそうだ。なにがそんなに嬉しいのかと、思わず問いたくなる。

こうして並んで立つと、シャナのほうが少し背が高い。それがどうも気になる。クロがまだ子ども部類に入る年齢だということが、気になってしまふのだ。

「……ジーン。白い靴で、踵がないの、あるかな」

「え？ あ、はい、ございます」

「履き替えてもいい？ もちろんシャナね」

「わかりました！」

シャナが気にしたこと気づいたのか、それとも自身が気になったのか、クロはシャナの靴を踵のないものに履き替えさせた。

「やっぱり。靴に踵がないと、おれのほうが背、高い」

気にならなくなったよね、という、優しい笑みを向けられた。視線が僅かにシャナのほうが低くなったただけだが、それでも、その心

遣いは嬉しい。

「だいじょうぶだよ、シャナ」

そつと、クロが耳許に囁いてくる。

「おれ、まだ成長途中で、背も伸びているから。あつというまにシヤナを追い越すよ」

近過ぎる声に、頬が赤くなったのは、クロを意識してのことではないと思いたい。

けれども。

「綺麗だね、シャナ」

不覚にも、その笑みには囚われてしまう。

頑なに閉ざしていたものが、音を立てて、崩れていく気配がした。

シヤナの付き添いにクロがつく。腕を絡め、並んで歩くさまは、さぞや仲睦まじく見えたことだろう。

夜会の席は、王女の婚姻を心から喜んでた。待ち望んでいた王女の婚姻だ。たとえクロの素性に疑念を抱く者がいようとも、それらは夜会の雰囲気呑まれ、影を小さくする。

王や王妃も、クロの挨拶には満面の笑みを浮かべ、祝辞を述べた。誰もが、喜びの中にあつた。

国の安泰を、安寧を、喜んでいた。

「クロ」

「ん……？」

臣下の家族と懇談中のシヤナから少し離れ、クロは壁を背にして、シヤナの後ろ姿を眺めていたところだった。そこにノエが、見かねたように声をかけてくる。

「その顔、どうにかしろ。ばれるぞ」

「……笑っているつもりだが」

「目が、笑ってないんだよ」

さすがはノエだ。完全に演技できていると思っていたのに、あっさりと思許の真実を見抜かれる。

「十秒、時間をやる。どうにかしろ」

そう言っただけで、クロの姿が誰からも見えないように、隠してくれる。深呼吸して目を擦れば、もうその顔は完璧な嘘に塗り替えられた。

「気が、抜けた。ごめん」

「なんで気が抜けるんだ。緊張するところだろ、ここは」

「いや、シヤナが……」

「シヤナ姫？」

「可哀想だなと、思ってた」

「……今さらだろ、そんなの」

もともと目つきも悪ければ愛想も悪いノエは、不機嫌そうな顔をしていても誰にも咎められない。それがたまに羨ましいクロは、笑みを張りつかせたまま、そっと溜息をつく。

「……いいのかなあ」

「それこそ、今さらだ。おい、また顔が……いい加減にしろ、クロ。隠せないならもう部屋に戻れ」

「あれ？ 笑ってない？」

演技は完璧のはずなのに、どうも、上手く仮面を被っていられないようだ。

どうしても嘘が見える目許を手のひらで隠すと、クロはさらに場所を移動し、人目を避ける。

「いったいどうした、クロ」

「いや、だから、シヤナが……」

「覚悟してた。今さら後悔してんのか」

「後悔はない……けど」

「けど？」

「シヤナを幸せにしたい」

「すればいいだろ。そのために国を出たはずだ」

「そう……そうだ、おれは、国を出た」

目許を隠しながら、クロは、その姿を探す。柔らかな笑みを浮かべ、凜としたその姿を見つけると、なぜだろう、涙が出そうになる。

「シヤナ……」

綺麗だと、思った。初めて逢ったその瞬間から、眩しくてならなかった。触れるのが怖くて、けれども逢いたくて、仕事の邪魔をしてまでも毎日通った。

まさか自分が、そこまで囚われるとは、思いもしなかったけれども。

今この瞬間が、真実なのだろうと思う。

「……シヤナ」

「ごめんなさい、という言葉が、あなたを傷つけるだろう。」

許して、という言葉が、あなたを失望させるだろう。

「おい、クロ」

「ノエ、おれは、シヤナにひどいことを、しようとしている」

「クロ」

「幸せにしたいのに……な」

崩れていく。

これまで、ばかみたいに笑っていた、その虚勢が。

壊れていく。

どうしたらいいだろう。

どうすればいいだろう。

身体から、力が抜けていく。

「いい加減にしろよ、クロ。顔がヤバいって、言ってるんだろ」

崩れ落ちそうになった身体を、ノエに腕を掴まれて、強い力で引っ張られた。

ハッとする。

「あ……悪い。また気が抜けた」

「それやめろ。緊張しろ、頼むから。無理なら部屋戻れ」

「いや、まだシャナのそばに……夜会も終わってないし、シャナと踊りたいし」

「なら顔をどうにかしろ。色も真っ蒼だぞ」

自分ではどうも、その不調に気づけない。ノエがいてくれて助かったと、正直に思う。

そのとき。

「どうしたの……」

シャナが、こちらに気づいていた。すぐ近くまで来ていたシャナから、ふわりと漂った優しい香りに、胸が疼く。

瞬間的にふつと微笑んだ。

「……シヤナ」

「どうしたの、クロ」

淡い色はもう似合わないからと、濃紺の礼装をまとうシヤナに、白の紗と白の靴を履かせたのは、シヤナには淡い色も似合うと思っただからだ。きつく見えてしまうその姿を柔らかく見せるために、金に輝く髪も細かに編み込んで大胆な形にした。

思った通り、シヤナの姿は変わった。予想以上に、美しくなった。シヤナは綺麗だ。

「……シヤナ、踊ってくれる？」

「え？」

「おれと、踊ってくれる？」

ちょうど、緩やかで静かな音楽が奏でられたところだ。人々は思い思いに、連れ添いと手を取り合っただけで中央に移動し、踊り始めている。その輪の中に、クロはシヤナを誘った。

「待って」

「ん？」

「顔色が悪いわ……駄目よ、休みなさい」

心配そうな顔をしているシヤナに、誘いを断られてしまう。それだけでなく、近くの椅子にまで座らせられた。

「シヤナと踊りたい」

「この先いくらでも機会はあるわ。今は我慢なさい」

「……この先、いくらでも？」

「ええ」

「おれが、下手くそでも？」

「練習すればいいわ。わたしも得意ではないのよ」

隣に腰かけてくれたシヤナは、ほんの少しだけ、優しく微笑んでくれる。

つと感じた罪悪に、胸が痛んだ。なんて都合のいい罪悪感だ。こ
うなることは、始めからわかっていたはずなのに。

「立場上、わたしは最後までここにいる必要があるの。あなたは先
に部屋へ戻っていたほうがいいかもしれないわね」

「……ここにいるよ」

「よくなるものも悪くなるわ。いいから部屋に」

「久しぶりに大勢の人に囲まれたから、人に酔っただけだよ。だい
じょうぶ」

「けれど……」

「ああほら、呼んでる。おれはここにいるから、だいじょうぶ、行
つてきなよ」

シヤナに声をかけたそうにしている貴婦人がいたので、クロは誤
魔化すようにシヤナの注意を反らすと、背を押しだした。

「……我慢できなくなったら、部屋に戻るのよ？」

「そのときはちゃんとシヤナに言うから」

心配してくれるシヤナを送り出すと、はあ、とこっさりため息を
ついた。幸せが逃げる、というのはシヤナに対しては言うものの、
自分に対してはどうとも思わない。

「うー……心臓痛い」

ああもう本当に痛い、とクロは胸を押さえながら身を丸めた。いっそ気絶できたらいいのに、と思うが、そう都合よくはいかない。

「踊るんじゃないかったのかよ？」

そう、ノエに言われて。

「踊るよ、シヤナと。けど……」

この先いくらでも、その機会はある。シヤナはそう言ってくれた。クロが下手くそでも、自分も得意ではないから一緒に練習してくれると言った。

「未来を、望んで……いいのかな」

それは本当に望めることだろうか。

「ごめんなさいと言ったことが、シヤナを傷つけるのに。許してと言ったことが、シヤナを失望させるのに。」

それは、いつかは、話さなければならぬことだった。知られて拙いわけではない。むしろ一番に知らせるべきことだ。それを黙っていたのは、クロが、自分が思った以上に、シヤナという存在に囚われてしまったせい。

崩れていく。

壊れていく。

国を出るとき、それは覚悟し、決めたことだったのに。

「おれの宝……は」

明日消える光りなら、今ある自分を光りの中に埋めよう。

朝陽を迎えられない運命なら、月夜の中で太陽を見つけよう。

たとえすべてを失っても、己の中に小さな灯火があれば、それは取り戻すことができるだろうから。

「ん……」

「起こしてしまったかしら？」

「……シヤナ？」

「ええ。気分はどう？」

「平気……ええと？」

「夜会が終わってすぐ、部屋に戻ったとたん倒れたのよ。憶えてない？」

「そう……だったかな？」

「医師が言うには、疲労が蓄積していたのでしょうねって。あなた、実はかなり緊張していたのね？」

ぼんやりと見やった先には、濡れた布を絞ってクロの額に置こうとしているシヤナの姿があった。

「緊張、というか……まあ、どうしたらシヤナに好いてもらえるかなって、ずっと考えことはしていたよ」

「冗談はやめてちょうだい」

額に置かれた布の冷たさに、クロはほっと息をつくと微笑む。あ
あいいなあと思ったのは、シヤナに看病されていることだ。

「本当だよ。おれは、シヤナのお嬢さんになりたくて、ここにいる
んだから」

「わたしに、今でもその気持ちがないとしても、そう言えるの？」

「だから、好いてもらえるように、いろいろと考えている」

「……まったく、諦めの悪い子ね」

嘘は言っていない。クロには、そういう下心がある。シヤナに好
いてもらう必要がある、ある。予想外だったのは、自分が逆に、シヤナ
を好いてしまったことだ。

まったく人間とは、人間の心とは、一様にならない。予想通りに
動いていくれない。

なんて、厄介だろう。

「シヤナ？」

「なにかしら」

真っ直ぐな瞳を寄こされて、ずくりと、胸が痛んだ。けれどもそ
れは、シヤナに知られてはいけない。

「……クロ？」

「今度……」

「ん？」

「今度こそ、おれと踊ってくれる？」

「どこで？」

「夜会では踊れなかったから」

額に置かれた布を取り、クロはゆっくり身体を起こすと、寝台から足を下ろした。立ち上がるうとしたらシャナに止められて、ふと顔を上げる。

「疲れているのよ。もう少し休みなさい」

「もうだいじょうぶだよ？」

目もぱっちりしているし、気分もすっきりしているし、そもそも倒れたという自覚すらクロにはない。肩を押してくるシャナの手を掴むと、逆に押し返しながら立ちあがった。

「クロっ」

「ねえ、シャナ、踏み出しは？ トワイライとは、違うでしょう？」

「教えて」

「え、ちよ、待って」

「トワイライはこっちから。はい、シャナ」

音楽も、観客もない。静かな部屋で、クロはシャナを無理やり促して踊る。自分が憶えた型でない踊りにシャナは戸惑い、しかしそれでもクロの誘導についてくる辺り、苦手とはいえかなりの練習をしたのだらうと思われる。

「あはっ、シャナ、トワイライの踊れるんだ？」

「む、昔、少し、習ったから」

「誰かと踊った？」

「そんなことあるわけないでしょ……っ」と

「おれが初めてか……いいね、初めて」

シャナのすべてが、初めてだったらしいのに。そう思っていると、シャナも徐々に踊りに乗ってきて、ふたりの波長が合ってくる。そ

うしているうちに、どちらとも真剣になってきて、音楽もないのに足音だけで気分が盛り上がってきた。

「上手いね、シヤナ」

「クロこそ」

「じゃあ次はセムコンシヤスの踊り！ シヤナ、おれを誘導して」

「病み上がりが無茶しないの」

「だいじょうぶだよ」

ほらほら、とシヤナを促して、トワイライの型からセムコンシヤスの型へと踊りを移行していく。やはり音楽はないが、気分だけでそれは充分で、シヤナもいつのまにか楽しげに踊っている。

「ふはー……っ」

飽きるまで踊ろうと思っていたが、さすがに疲れて寝台に転がったときには、呼吸が少し乱れて苦しくなっていた。もちろんシヤナも、肩で息をしている。

「久しぶりに真剣に踊っちゃったわ……しかも病人相手に」

「おれは病人じゃないよ」

「似たようなものよ」

「おれはもうだいじょうぶだよ。あー楽しかった！ シヤナは？」

「もう……楽しかったわよ。踊るのが楽しいだなんて、初めて思ったわ」

「初めて？ うわぁ……やっぱり初めてっていいなあ」

誰かの始めてをもらえるとというのは、意外にも嬉しいことだ。もしかして夜のほうもおれが初めてになるのかな、などと考えて、それも嬉しいと顔が綻ぶ。

「なに笑ってるの？」

「なんだか楽しくて」

「楽しい？」

「外がこんなに楽しいところだったなんて、予想外だ」

「……そと？」

「おれは国から出たことがなかったから」

生きていた中で、こんなにも楽しいと言えるなにかが、あつただろうか。そう考えて、出てくる答えは一つもない。今このときを除いて、楽しいと言えたなにかが、クロにはない。

「今がある……そのことが、嬉しいなんて……初めてかな」

これが「幸せ」というものなら、ずっとこの中にいたいと思ってしまう。そんなことは無理だとわかっていても、望んでしまう。それが生きている人間だということなのだろう。

「あなたはいつも笑っていて、なにが楽しいのかよくわからなかったのだけれど……そんなふうに考えていたのね」

「ん？」

「遅れて到着したのは、初めて出た外の国が、珍しかったからなのでしょう？」

「んー……まあ、二度とあることではない、からね」

「そんなことないわ」

ふと見やったシヤナは、クロが想像していた以上に、真摯な瞳をしていた。

「……シヤナ？」

「二度もない、なんてことは、ないわ。あなたは今ここにいて、こうして生きている。願いを、望みを、抱くことができる。それは確かな、あなたの想い。想いは大切にしなければだめよ」

思わず、息を呑んだ。それはシャナに気づかれることのないほど小さな仕草だったが、クロはシャナの言葉に驚いていた。本当に、と訊き返しそうになって、かろうじてそれが音になることを防げたのは、ずくりと痛んだ罪悪感からだろう。

クロは閉口し、シャナを見つめた。

美しい人だと思う。この人が自分の妻となるなど、信じられないけれども自分は確かにこの人の夫となるべくして国を出、認められるべくして行動している。

自分はいつまで耐えられるだろう。

「クロ、あなたの願いはなに？」

ああ、耐えられないかもしれない。

この罪悪感を。

欺くというこの行為を。

この願いを。

好いてしまった人に隠し続けることは、できないのかもしれない。

「……予想外だよ」

「え？」

「おれはきみが好きだ」

想いを大切に。

そう言われてしまったら、言わずにはおれない。

「……冗談はよして。たった数日で、わたしのどこが好きだという

の。いいのよ、無理しなくて。わたしは国の体面を保つために、大
国であるトワイライ帝国からの縁談を受け入れたのだから」

「冗談なものか。そう言ったところで、シャナは聞き入れないだろ
う。それはわかっている。」

それでも。

「おれがきみを……シャナを愛しているという事実は、おれにとっ
て、大切な想いだ」

「上手い冗談ね」

笑って、流されそうになったとしても。

動かない現実と、偽れない真実がある限り、それは否定しようが
ない。

「……シャナ」

「なにかしら」

「どうか、悲しまないで欲しい」

「え？」

寝転んでいた身体をゆっくりと起こしながら、クロは、呼べばど
こからでも現われる風のような騎士を呼ぶ。

「ノエ、やっぱりやめるよ。すごく、心臓が痛いから」

寝室には、クロとシャナのほかに、ひっそりと控えている侍女や
侍従がいたが、それ以外に人気はない。あるのは静寂、そして人な
らざるもの。

「言っの早過ぎだな、おい」

ノエは、隣室の壁を通り抜けて、その姿を現わした。

ノエのいきなりの登場は、シャナをひどく驚かせた。音もなく、風のように現われたのだから無理もない。ひっそりと控えていた侍女や侍従でさえ、ノエの登場には驚いている。クロも、出逢った頃はよく驚いた。

「いったい、どうやって……今、壁を通り抜けなかったかしら」

「壁なんておれにはあつてないようなものですよ。おれは精霊なん
でね」

さらりと人間ではないと言ったノエに、驚きっぱなしのシャナがクロを振り向く。クロは、苦笑にも似た笑みを浮かべた。

「ノエは、ノルイエ・レス、という精霊なんだ。おれの祖母に召喚されて、契約して、おれのそばにいる」

「……どういうこと？」

「言つつもりは、なかったんだけどね……予想外なことが起きてしまったから、隠していられなくなってしまった」

「隠す……？」

いや、隠していたのでは、ないのかもしれない。言わなければならぬことを、言わずに、黙っていた。知らせるべきことを、知らせずに、言うことができずにいた。それは騙しと、欺きで、クロに罪悪感を募らせた。

あれだけシャナに知られてはならないと思ったことを、こんなにもあっさり吐露しているなんて、自分は今までなにを隠そうとしていたのだろうと、そんなことさえ思った。

「ノエが精霊であると、隠していたの？」

「人型の精霊だから、黙っていれば気づかれない。それなりの恰好をさせれば、特にね。おれより皇子っぽいでしょう」

「それは……思ったことだけれど」

「黙っていてごめんね」

「……謝る必要があるもの？」

「騙っていたことになるし、欺いていたことにもなるから」

「それは、わたしを？ それとも、この国を？」

「どっちも」

その瞬間に、シャナはカツとしたように苛立ちを顔に出した。あやっぱり怒るよなあと、暢気にも思ったクロだったが、シャナはすぐに深呼吸すると苛立ちを抑えたようだった。

「なんの目的があるの？ いえ、あつたの？」

「どうして言いかえるの？」

「わたしにそれを謝って、今ここで懺悔しているのなら、目的は達成されなかったということになるわ」

さすがシャナ、とクロは笑う。

「罪悪感にね、負けた」

「罪悪感？」

「言ったでしょう。おれは、シャナが好きだ」

「こんなときに冗談はやめて」

「予想外なことなんだよ、シャナ」

「……予想外？」

「おれは、シャナを好きになる、つもりはなかった」

ああ、傷つけている。それをわかりながらも口にした言葉に、やはりシャナは傷ついたような顔をした。

やっぱりこういう顔はさせたくないし、見たくない。

「けどね、好きになった。シャナが好きだから、隠していられなくなった」

「……冗談ではないの？」

「これだけは信じていいよ。シャナを愛している事実は、もう消えないから」

微笑みながら偽りのない想いを伝えると、シャナから傷ついた表情が消える。むしろクロの言葉を、冗談ではないのかと、真摯に受け止め始めていた。

「目的はなに？」

「ん？」

「わたしが好きだと言うその裏は、なんなの？」

「だから、罪悪感に負けたんだって。すごく心臓が痛いしね。これじゃあ元も子もない」

「どういふこと？」

「気づいて、シャナ。どうして天恵者でもないおれのそばに、ノエがいるのか」

言葉遊びでもするように問えば、シャナは当惑したようにノエへと視線を流し、肩を竦められると再びクロを見つめてくる。

「あなたのおばあさまと、契約しているからでしょう？」

「それはどうして？ 祖母と契約しているのに、どうしておれのそばにいろの？」

「……あなたも天恵者？」

「違うよ。おれはまったく、欠片も、天恵がない」

「それなら……なぜ？」

本当は言いたくない。シヤナを好いてしまったからこそ、言えなくなってしまった。隠すつもりも、騙すつもりも、欺くつもりも、最初からなかった。クロがシヤナを好くということさえなければ、それは出逢った当初から了承されることだった。言えずにいた期間があつたからこそ、こうして言いたくもないのに言わなければならぬ事態が、起きた。

愚かなことをしたと、思う。

さつさと言ってしまったら、よかったのに。

「おれは、ね……ノエに、生かしてもらっている」

どうかこの一言で、察して欲しい。どうかこれ以上、言わせないで欲しい。それはシヤナへの想いが、訴えてくることだ。

「生かして……もらっている？」

「そう」

「……それは、命のことを言っているの？」

やはり、シヤナだ。言わずして、察してくれる。

「昔、祖母は契約した。この脆弱なわが孫を、命数尽きるまで、護つて欲しいと」

「……それが契約の」

「文言というやつだね。かくして召喚された精霊は、その瞬間から

今に至るまで、契約に従って孫を守護している」

「……意味が、わからないわ」

ふるふると首を左右に振ったシャナは、その答えを求めるように、ノエを見上げた。

「……本当に精霊なの？」

「ええ。精霊位は上から二番めのレス、名はノルイエ。こんなナリですが、水の精霊ですよ」

「クロを、護っているの？」

「セイエンにお守りを頼まりましたので」

「クロは、生かされていると言ったわ。それは、どういふこと？」

「そのままです。おれの力で、クロは生きてんですよ」

理解したのか、していないのか、シャナはゆっくりと視線をクロに戻し、じっと見つめてくる。

「どうして……生かされている、ということになるの？」

やはりそれを訊かれるか、とクロは苦笑し、ふっと息をつく。言わずにはおれないらしい。

クロは、胸に手を置いた。

「おれはここに、病を抱えている」

その瞬間、シャナは息を呑んでいた。見開かれた双眸が、なんだか痛ましくて、自分のことではないのに自分のことのように受け止めるシャナが、可哀想に思えてくる。

「生まれつきだね。誰に似たのか、随分と脆弱なんだ」

「そんな、大事なこと……どうして黙っていたのっ」
にこりと、クロは笑む。

「死ぬつもりで、国を出たから」

言うことができずにいたそれを聞いたシャナは、クロが思ったとおり、ひどく混乱しているようだった。

「なぜ……笑って、いるの」

「ずっと前から覚悟がある。おれの命は短い」

「そんなのわからないわ。病が治ることだって」

「その可能性はない」

だから、とクロは、シャナへの笑みを深める。

「ごめんね」

それでも、と言葉は続く。

「おれは、シャナが好きなんだ」

部屋を、飛び出した。なぜ黙っていたのか、なぜ今になって酷なことを言うのか、いくら訊いても答えてくれなかったから、腹が立って部屋を飛び出してしまった。それが悔やまれる。誤魔化そうとしているそれに、腹を立てずにいればよかった。きちんと、訊くべきことを訊けばよかった。

「姫さん」

はっと、顔を上げる。部屋を飛び出したものの、シャナは扉の前にしゃがみ込んでいただけだ。戻るに戻れず、自室へ帰ることもできず、そうしていた。そこに、どこからともなく現われたノエが、視線をシャナに合わせて屈んでいた。

「ノエ……訊いていいかしら」

「そのために来ました。おれに答えられる範囲でなら、なんでもど
うぞ」

ノエは、悲しそうに微笑んだ。先刻まで飄々としていたのが、嘘
のようだ。

「どうしてクロは黙っていたの？ 今になって、どうしてそれを教
えてくれたの？」

「その答えはクロが言いましたよ。クロは、姫を妻に迎えても、本

当然の意味で妻にする気はなかつたんです。さつさと身体のことを告げて、悠々と隠居する気だつたんですよ」

「わたしがそれを許さなかつたら、どうするつもりだったの」

「あいつには帰る場所が、もうありません」

帰る場所がない。それはクロの口からも聞いた。

「なぜ？ トワイライは、クロを追い出したというの？」

「いいえ。セイエンが、死んだんです」

「え……」

「意味、わかりますよね」

静かな問いかけに、頷くことができず、シヤナは瞠目する。

セイエンとは、ノエの契約主でありクロの祖母、皇太後のことだ。ノエの口ぶりから、おそらく最近のことなのであるが、亡くなっていたとは知らなかった。

「今はまだかろうじて契約は残っていますが、いつ消えるかもわからない。それに、たとえ帰ろうと思っても、その契約が切れてしまえば……わかりますよね」

「……クロは死ぬの？」

「あいつはもう、それだけ体力がないんですよ。おれの言葉で言うなら、命数が残り僅かだということです。だからあいつは、もうトワイライには、帰られない。姫に拒絶されても、けっきょくのところ、あいつは死ぬしかないんですよ」

なにがどうなろうと、その結果は変わらない。運命を変えることはできない。遅かれ早かれ、クロには、その結末が待ち受けているだけだ。シヤナに拒絶されても、国に帰ることすらできないのである。

なんて、寂しいことだろう。
なんて、悲しいことだろう。
込み上げてきた涙に、シヤナは唇を噛んだ。

「ご家族は、なにも言わなかったの？」

声が震える。自分がなぜここまで悲しいと思っているのか、シヤナにはわからない。それでも、悲しくて寂しいことだという、切ない胸の想いには耐えられない。

「ラウルもアンジェラも、クロの命数はわかっていました。だから、最期の旅だと許したんです」

ラウルとは、トワイライ帝国の皇帝、アンジェラは、皇妃だ。つまり、クロの両親である。

「最期だなんて……なぜ決めつけるのよ」

「姫。クロは、わかってんですよ。どうしようもないってことを」

「病は治せるわ……っ……今からでも遅くない」

「風と水を司る神ミストでも、クロの病は治せなかったんです」

「なぜ諦めるの!」

誰もが、クロは死ぬのだと、覚悟している。だがシヤナは、認めたくない。なぜ自分が強くそう思うのか、それはわからないけれども、クロがいなくなってしまつのはいやだと思った。天地がひっくり返っても、否定してやりたい。

認めたくないと言を左右にふり、拳を握っていると、屈んでいたノエが僅かに身動きした。

「おれは、諦めちゃいませんよ」

そう言ったノエの気配に、なにか、悲しみとは違うものを感じた。

「ねえ姫、おれに提案があるんですけど、聞いちゃくれませんかね」

「……提案？」

「まあ、まだ時間はあるんで、ゆっくり考えてください。ぎりぎりまでおれは待てますから」

「どうということ？」

「これは可能性の一つです」

見つめた先のノエは、ただ静かに笑みを浮かべている。

「おれの提案、姫なら時期がくれば、わかると思えます。おれの言葉を理解できるようにになったら、おれの提案を受け入れてください。それまで待ちますから」

「待って、ちゃんと説明して。教えて」

「今はその必要がありません。わかる 때가、必ずくると、おれは信じます」

「ノエ！」

言うだけ言って、ノエは立ちあがる。少しだけ楽しそうに見えるのは、きつと気のせいではない。

ノエがなにを提案と言っているのか、それがわからないまま、シヤナは壁の向こうに消えるノエを見送ってしまった。

シヤナは項垂れた。この胸に渦巻く想いを、どう消化したらいいのかわからない。クロを失いたくないと思っっている自分に驚く一方で、あの天真爛漫な姿に自分がどれだけ心癒されていたのかを思い知る。

どうして今になって、こんな想いを抱かせるようになってから、クロは秘密を口にしたのだろう。

『おれは、シヤナが好きなんだ』

脳裏に浮かんだその言葉に、耐えていた涙が、頬を伝って落ちて行く。

「そう、そうなのね……わたしがあなたを好きになる、その可能性を、あなたは否定していたものね」

好きになるつもりはなかったと、クロは言っていた。けれども好きになったと、言っていた。クロは、耐えきれなくなって口走ってしまったのだ。言いたくないことを、言ってしまういたくなるくらいに、不安になってシヤナに甘えたのかもしれない。

だから、だろうか。

「わたし……っ」

小さな嗚咽が、咽喉を突く。

「どうすれば、いいの……っ？」

クロを、失いたくない。

大国の皇子だから、国の体面があるから、この婚姻をなかったことにはできないから。

たくさんの思惑はあれど、想いは違う。心は違う。

「あなたを、失いたくないわ……っ」

もろもろの諸事情などどうでもいい。ただ今は、シヤナが、クロ

を失いたくないと思っている。

この気持ちは、なんだろう。

わたしはなにを、望んでいるだろう。

なにをどうすれば、この気持ちに、追いつくことができるだろう。

『おれは、シャナが好きなんだ』

その真っ直ぐな瞳に、なにを、返せるだろう。

「クロ、わたし……っ」

わたしはあなたを好きになっても、いいだろうか。

こんな歳上の、花盛りも過ぎた女だけれども、その笑顔を失いたくないと思うこの心を、大切にしてみいいだろうか。

わたしを好きだという、その言葉を信じて、愛されていると思っても、いいだろうか。

11 : 応えるのは怖い。

ぼんやりしながら、政務を片づけていた。昨夜のことが気になつてよく眠れなかったのもあるが、自分の心にあつた気持ちにも驚いて、感情があちこちに飛んで収拾がつかなくなつてしまつたせいだ。

「はあ……」

と、ため息をつくとき、シヤナの政務を補佐してくれている者たちが、「ため息をついたらせつかくの幸せが逃げてしまいますよ」と、クロみみたいなことを言ってきた。クロの存在は、いつのまにか随分とここに馴染んでいようだ。

「シヤナあーあ、お茶にしよう」

と、恒例行事のように、クロがいつもの姿で現われた。瞬間的にどきりとしたが、シヤナがなにかを口にするよりも早く、補佐官を始めた部下たちが「昨夜はだいじょうぶでしたか」とクロを心配し、無理をしないようにと労う。誰かの心配をするよりも政務に勤しむ部下たちの姿に、クロが与えた影響はすごいなと思った。

「なんかもこもこにされてしまった……シヤナ、助けて」

シヤナが考えごとに没頭している間に、部下たちにかまわれたクロは、たくさんの枕が敷き詰められた長椅子に座らせられ、その中

に埋もれていた。なんとなく愛らしいその恰好に、くすりと、笑みがこぼれる。これで子どものぬいぐるみを持たせたら、もっと可愛いかもしれない。

くすくすと笑っていたら、ふとクロが、不安げな顔で見上げてきた。

「……………シヤナ、怒ってない？」

「え？ どうして？」

「おれ……………黙ってたから」

「……………ああ、そのこと」

昨夜のことを、口走ってしまったと思っていたのだろう。気にしていないわけではないが、クロがそんな顔をする必要はない。

シヤナは枕を避けて自分の座る場所を確保すると、枕の一つをクロにわざと持たせて、長椅子に腰かけた。

「今はなにも言えないわ……………考えさせて欲しいの。整理ができないから」

「……………ごめん」

「……………どうして謝るの」

「言うつもりはなかった。けれど……………シヤナが……………本当に予想外だったんだ。シヤナに迷惑をかけるつもりはなくて……………だから、言う必要なんかもなくて」

どうやら、シヤナが思ったことは、あながち外れてはいないようだ。

クロは、己れの運命を不安に思って、シヤナに甘えた。

ぶわりと心が揺さぶられる。
強い衝動に、息が詰まりそうになる。

「……今、身体は平気？」

「シヤナ……それは」

「教えて」

「……ノエからもらえる力が弱くなってるから、少し……その「
「つらい？」

「気にしないでいいから。うん、たまにあることだし、慣れてるか
「ら

心配させまいかとするようなその態度に、込み上げてくるものがある。

「無理はしないで。ここで少し休むといいわ」

「邪魔はしない。お茶したら、すぐ戻る」

「いいから。わたしがそうしてと言っているのだもの」

この気持ちは、包んであげたいと思うこの心は、なんだろう。
そう思って、すぐに思い当たる。

護りたい、だ。

シヤナは、クロを護りたいと、庇護欲にかられている。

「枕をここに。そばにいるわ」

「シヤナ……でも」

「歳上の言うことは聞くものよ」

少し強引ではあったが、クロに持たせていた枕をふたりの間に置くと、クロに手を伸ばして肩を引き寄せる。枕はちょうどいい緩衝材になってクロの身体を労わり、シヤナの身体を支えた。

「優しいね、シャナ……優しいのは、おれがいつそうなるとも、わからないから？」

「そうかもしれないわね」

「そっか……そうだよ。けど……そんな同情でも、おれは嬉しいと思ってしまう。ごめん、シャナ……ごめん」

「なぜ謝るの」

「それでもおれは、シャナが好きだ」

どきりと、する。

わたしも、と言ったら、クロはどうするだろう。昨日の今日で、と呆れるだろうか。無理しないで、と信じないだろうか。それとも、心変わりしてしまうだろうか。

「ごめん、シャナ……おれ、気持ちを抑えられない」

ふと身体を起こしたクロが、間に置いていた枕という距離を、取り払う。しがみつくように胸に回された腕は、強くシャナを求めてきた。

「クロ……」

「こんなことまでして気を惹こうとして……ごめん、呆れるよね。情けないよね。こんなことしてまでも、シャナの心が、欲しいなんて」

昨夜のことが、たとえクロの嘘だとしても。クロのこの、天真爛漫で朗らかな気性が、嘘とは思えない。それが不思議だ。

「……ここにいるから、休みなさい」

クロの想いに応えようと思わないのは、クロがいなくなってしまうことを、否定したいからだ。応えてしまったら、それに満足したクロが、天命を享受しそうで怖い。

そうシヤナが自覚するのは、このあとすぐのことだ。

「なぜ座卓なのだ」

クロがシヤナの執務室に通うのが名物となつて、さらにシヤナの膝を枕にして居眠りをするという行事が増えたとき、父王がシヤナの執務室を訪れた。名物を見に来たらしい。

「ここでクロが眠っているからよ」

シヤナは膝元を指さし、膝を枕にされていると、その姿を見せると、父王は目を真ん丸にしたあと嬉しそうに笑んだ。

「よいことだ」

座卓が用意されたのは必然だった。クロが居眠りをするという行事を増やしたため、政務が捗らなくなつたからだ。シヤナの膝を枕にするということがなければ、それほど政務が停滞することもなかっただろう。ゆえに、座卓が用意された。ちなみに補佐官たちの苦肉の策だ。執務室から机や椅子は撤去され、代わりに絨毯と座卓、長座布、大量の枕が部屋に入れられたのである。

「皇子は幸せそうだな」

「……そうね」

「よい影響をもたらしてくれているようだ」

「そうかもしれないわ」

「おまえの態度が軟化した」

「それほど硬かったかしら」

「誰かに気を許すなど、今までになかったことだ。これはよいことだぞ。式典が楽しみだな」

満面に笑みを浮かべた父王は、クロが遅れて入国したことを気にして、トワイライ帝国からなにか言われるのではないかとしばらく案じていた。幸いにもトワイライ帝国からは「末皇子を頼む」としか言われなかったため、心配ことは減ったようではあるが、問題はシヤナの態度だ。それもこの姿を見て、安堵した様子ではある。

「早く孫が見たい」

「気が早いわ」

「いや、まあ、そうだな……おまえには無理をさせてしまって、申し訳ないと思っている。親なら、子が望むように、してやるものを……わたしは駄目だな」

「わたしは王女よ。たとえ後継者がわたしでなくとも、わたしは国のためを、考えるわ」

「……すまない、シャルナユグ」

「それが王族に産まれた者の務めよ」

「そう、だな……だが、皇子とおまえが幸せそうで、よかった。少しでもおまえが望むものを、わたしは与えてやれたらどうか」

幸せか、と問われているようなそれに、シヤナはふと考える。

この状態にあるのは、クロが執務室で居眠りをするようになってしまったからだ。いやなら拒絶すればよかったことだ。休憩のお茶も、いやなら断れば済むことだった。

シヤナは、どちらもいやだとは思わなかった。むしろ、するりと入り込んできたクロに、あっさり馴染んでしまった。簡単に受け入れてしまったのである。

そして、今のこの状態は、いやだとかそういふなにかを思う前に、

クロを包み込みたい気持ちが溢れた結果だ。一晩で様相を変えた執務室に、部下たちの仕業かと呆れもせず、これならクロを膝に抱いたまま政務をこなせると思ったくらいである。

つまりはごく自然に、シヤナはクロを受け入れた。それは甘受している、言えるだろう。

幸せかどうかはともかく、膝の重みは心地よいと、シヤナは思っている。

「……………それほど悪くないわ」

クロを失いたくないと思うこの気持ちを、大切にしたい。それは確かで、その結果がシヤナを、動かしている。

そう、大切なのだ、クロが。

好きだと言われることが、とても、嬉しいのだ。

愛されているという心地よさが、いとしいのだ。

失うことなど考えられない。

けれども、クロの想いに応えるのは、怖い。

もしクロが、想いに応えたシヤナに満足してしまったら、これまでのものが壊れてしまいかもしれない。

誰かを愛し、愛されるというのは、恐怖がつきまとうものらしい。シヤナはそれを知った。知らなければよかったかもしれないと、思ったこともある。けれども、知らなかった頃には戻れず、また戻りたいとも思わない。

初めての想いに戸惑うことも多いが、その相手がクロでよかったと、シヤナは安堵している。クロは、さまざまな感情で、シヤナを揺さぶるのだ。こんなことは、二度と経験し得ないだろう。

「ん……………しゃな……………」

「おっと、婿どのが起きてしまうな。わたしはこれで退散しよう」

まだ起きる様子は見られないが、身動きしたクロに父王が少し焦った。

「ああそうだ、シャルナユグ」

「はい？」

「わたしは、今のおまえのほづが、とても好きだ」

「……父さまったら」

「孫を楽しみにしているぞ」

にっかり笑った父王は、足早に執務室を出て行った。

「しゃな……？」

「なんでもないわ。まだ眠っていてもいいわよ、クロ」

「そ……？」

「ええ」

「……しゃな」

「なあに？」

「すきだよ」

にこお、と花が綻ぶように微笑んで眠りに戻ったクロに、想いに応えるのはやはり怖いと、シヤナは感じた。

方法はないかと、考えた。

クロを失わずに済む方法を、シヤナなりに考えた。

けれども、なかなかいい方法は思い浮かばない。

クロを生かしているというノエの精霊の力は、もとはクロの祖母が願い、その末に契約して得たものである。だが、ノエの契約主であるクロの祖母が他界した今、かろうじて残っている契約はいつ消えるともわからないものだ。それは明日かもしれないし、数年後かもしれない。そのあたりのことは、ノエもわからないのだと言っていた。

欲しい時間が足りない。

それはシヤナを焦らせた。

そんな折、唐突な来訪を受けた。クロは神殿へ神学を学びに、シヤナはいつものように執務室で補佐官と仕事をしていたときである。

「デイラン国の王子が？」

「はい。先ほどご到着あそばして、今こちらに向かってきております」

「今さらなんの用なのよ……夜会にも来なかつたくせに」

「お止めしたのですが、おそらく時間稼ぎにしかないかと」

「諦めて逢えと言っのね」

「申し訳ございません。わが国とデイラン国が今、微妙な関係にありますれば」

「それはわかっているわ。クロがいなくてよかったと思ったのよ」

逢いたくもない人間に逢わなければならぬ。それはよくあることだが、デイラン国の王子とは、それでも逢いたくない人物の筆頭である。派手な衣装に、傲慢で高慢な態度、傳かれることを当たり前とし、人を道具か玩具のように思っている、そんな王子だ。顔も見たくないし声も聞きたくない。存在すら否定したいと、シヤナは思い出すたび思っている。

「父さま……陛下はなにをしているの？」

「一緒においになつた使者どのと、謁見中にございます」

「それ、ふつうなら王子も一緒するものではなくて？　むしろ王子が主役でしょう？」

「そのあたりが、まあ、デイラン国の王子……でしょう」

「はああ……いやなものね、まったく。クロとは正反対だわ」

「殿下、おいやでしょうが、どうか、お気持ちを……」

「ええ。仕方ないわ」

いやでたまらないが、デイラン国とは今、微妙な関係にある。体的なことを考えると、王子の横暴を許容しなければならぬ。シヤナの一挙一動に、国が左右されるときだ。

「この部屋に通すのはいやね……フィル、どこかいい場所はないかしら？」

「では控え室はいかがでしょう？　殿下が使われていた机はそこに移動させているのです。なにかのために、と」

「使うときがきたわね。さっさと移動しましょう。王子を案内している者に、そちらに誘導させなさい」

「御意」

「それから、クロが戻ってきたら、こっちに通して。王子には逢わ

せないように」

「承知いたしました」

数分、或いは数十分、デイラン国の王子をやり過ごせればいい。その分だけの書類を持つと、シャナは補佐官たちと執務室を出た。

控え室は、本当は部下たちの休憩のためにと用意していた部屋なのだが、クロが執務室に通うようになってからは使うことがなくなっていた。クロの姿に癒されるとかで、部下たちがそちらへ移動しなくなったのだ。たまに使うようではあるが、今やほぼ物置に近いらしい。

歩いてすぐの控え室へ向かい、部下の筆頭である補佐官フィルが扉を開けようとしたときだった。

「俺の歩く道にいるんじゃないよ」

廊下に響く声と、そして大きな物音が、シャナの耳に届く。なにごとかと顔をそちらに向けると、目に痛い派手な衣装が目に入った。

「……………歩く公害ね」

見たくもないものを見てしまった気持ち悪さに、シャナは毒づく。しかし、それ以上の言葉は続けられなかった。

「殿下、クロネイさまが……………っ」

フィルが見つけた姿をシャナも見つけ、瞠目する。大きな物音の正体は、デイラン国の王子に蹴りつけられた、神官服姿のクロだったからだ。

「クロ！」

いやなものなど吹き飛んだ。クロの、横たわって腹部を抑えているその姿だけが、シャナをいっばいにした。

「おお、これはこれは、セムコンシャスの姫」

シャナに気づいた王子が、横たわるクロを踏みつけながら、大げさな身振りでシャナを迎える。

カツとなった。国大事であるが、それどころではなかった。

「退きなさい！」

「はい？」

「その足を退きなさいと言っているのよ！」

「はて……姫はなぜそのように怒るのでしょうか？ この者はわたしの歩く道を邪魔したのですよ？」

だからなんだ、と思った。クロがそんなことをするわけがないだろうと、思った。確かにふらふらとした頼りない歩き方をするが、それはノエのから与えられる力が弱くなって、長い距離を歩けなくなりつつあるせいだ。休み休み歩かなければならないほどに、クロの身体は徐々に体力を失っているのだ。

「退きなさい！」

動こうとしないデイラン国の王子に業を煮やし、シャナは王子を押し退けると床に膝をつき、呻いているクロを抱き起こす。

「クロ……っ……クロ、だいじょうぶ？」

「うく……しゃ、な？」

「すぐに医師を呼ぶわ。ノエはどこ？ ノエ、もうだいじょうぶよ、

近くにいるなら医師を呼んでちょうだい。すぐに、お願いよ」

姿を見せないノエは、おそらく国の体面を考えてくれたのだろう。主君を犠牲にしてまでも、シャナの国を考えてくれたに違いない。もしこれが祖国であったなら、テイラン国の王子を痛めつけるだけでなく、闇に葬っていたことだろう。シャナが呼ぶとすぐ、するりと姿を見せ、医師を呼ぶために走ってくれた。

「無視とはひどい。それに、神官ごときをなぜあなたが気にかけるのです」

場違いな不機嫌そうな声が、シャナを不愉快にさせる。これだからテイラン国の王子はいやなのだ。

「クロネイは神官ではないわ」

「おや、それは失礼。ですが、神官の恰好をしている。その者は神官でしょう」

「わたしの夫よ」

瞬間的に、テイラン国の王子から、表情が消える。なにをしに来たのかは知らないが、おそらくはシャナが婿に迎える者の様子を見に来たのだろう。隙あらば、となにか企んでいてもおかしくはない。

「神官が、あなたの夫、だと？」

「神官ではないと、言っているでしょう。神殿へ行っていたから、その恰好をしているだけよ。夜会にも来なかったあなたには、わからなかったのね」

「ええ、わたしはその日、ちょっと用事がありましたね。代わりの使者を送りましたので」

嫌味とも皮肉とも取れる言葉に気づかないデイラン国の王子は、僅かに唇の端を上げ、偉ぶった態度で見下ろしてくる。とても不愉快な視線に、シヤナは目を背けてクロを抱きしめる腕に力を込めた。

「しかし、そんな軟弱な男が、あなたの夫とは……なんというか」

「なにかしら」

「悲しいですね」

「あなたにそう言われる筋合いはないわ」

デイラン国の王子に比べれば、いや、比べるまでもなく、クロは己れの夫に相応しいと、この瞬間にシヤナは思う。やはり王子のような人間は、どうしたって好意的にはなれない。

「フィル、陛下のところへ行ってくれるかしら。ことの次第を陛下にお伝えして、デイラン国の方々をお帰しして」

「御意」

これ幸い、とばかりにフィルが走ってくれたが、その一方で、デイラン国の王子は僅かに動揺を見せた。

「お待ちを、姫。わたしは彼に」

「邪魔だと、蹴ったわね。踏みつけて、痛めつけたわね」

「わたしの歩く道を邪魔したからです。わたしは悪くない」

「あなたの一挙一動が、国の一大事に繋がると、どうしてわからないのかしら」

「わたしは悪くないっ」

「わたしの夫は、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライ、というの。ご存知かしら」

「そんなことくらい知ってますよ。だからなんだというのです。わたしは悪くないというのに」

利用させてもらうのは申し訳ないが、今ここからデイラン国の王子を排除するには、クロの名がもっとも有効的だ。

「ああ、思い出した……デイランの、カルト王子だ」

「クロ、喋ってはだめよ」

「や、だいじょぶ……くないけど、少しなら」

きつく閉じていた眼をうつすらこじ開けたクロが、僅かに焦った様子のデイラン国の王子カルトを見やって、なぜか笑む。

「父上が、銀山が欲しいと、言ってた」

「？ なにを言っているの？」

「民に圧制を強いる余裕があるなら、もらおうかなと……気をつけないと、トワイライが持つてくぞ」

ハツと気づく。自国セムコンシャスト、デイラン国が微妙な関係にあるのは、デイラン国にある銀山が原因だ。デイラン国の特産である銀が、近年高値になりつつあり、取引があるセムコンシャスト、その問題から関係が微妙になったのだ。そうでなくとも、デイラン国は銀山のことで、各国ともめ事を起こしている。クロの祖国、トワイライ帝国でも、それは同じなのだろう。

「権力もない末の、見捨てられた皇子のおまえに、なにができる！」

急に声を荒げたカルトも、さすがにその問題には気づいたようだ。そして、それをクロが脅しの文言にしていることにも、気づいたようである。

「確かに、おれに権力なんてものは、皆無だけど……おじいさまは

おれに甘いからなあ」

最大の脅し文句だ。デイルン国とトワイライ帝国では、まず国の規模が違う。戦争になったとしても、一日でその決着はつくだろうというくらいに、まず持っている力が違うのだ。

「シャナ、おじいさまに伝えておくよ。銀山要らないみたいだからって」

それはどこかに痛みを置き忘れたかのような、さっぱりとした笑顔で、クロは言った。

「……っ、くそ！ おれは悪くないってのに！」

丁寧に心がけていたのだらう言葉も忘れ暴言を吐いたカルトは、身を翻すと逃げるように走り去った。

大国トワイライ、その規模と権力はやはり、この大陸一である。

今さらだが、外交的な面でトワイライ帝国という後ろ盾はとても大きいらしいと、シャナはどこか複雑な気持ちで小さくため息をついた。

「ああ、幸せが逃げる……だめだよ、シャナ。どんなときでもため息はだめだ」

暢気なクロに、苦笑がこぼれた。

「皇子……いえ、クロネイ殿下のご容態ですが、この、脇腹の骨にヒビが入ったようでございます。ご負担のないよう固定しましたので、しばらくは安静にしてください」

「骨にまでいつていたの？」

デイランの王子に腹部を蹴られたクロを診察した医師に、シャナは眉をひそめた。

「こう申すのはなんともいやなのですが、当たり所が悪かったのだと思われます」

「当たり所って……なんてこと。最悪だわ」

「ごもつとも。それから」

「まだあるの？」

「はい。肩と背に打撲、腕と足に擦り傷がございます。ですが、こちらはすぐに治りますのでご安心ください」

「……満身創痍だわ」

怪我だらけではないかと、シャナは頂垂れながら椅子に腰かける。寝台にはクロが、少し息苦しそうにしながら眠っていた。

「本当にだいじょうぶなの？」

「今晚から明日、明後日は熱が出ます。感染症などの危険がございますので、こちらのほうで完全看護とさせていただきますとついでいま

す」

「命に関わることは？」

「今のところはございません」

だいじょうぶです、と医師は言うが、クロの身体は特殊だ。怪我で臥せっている間に、ノエの契約が切れてしまう可能性だって低くはない。

「早く治して。お願い」

「は……ですが、それにはクロネイ殿下の体力の問題も」

「お願いよ」

「姫……こればかりは」

「クロに苦しい思いをさせたくないの。お願い」

「……、承知いたしました」

無理なことを言っていると、無茶なことをさせていると、そう思っても、クロのことを考えると言わずにはおれない。

「わたしがそばにいても、なにもできないけれど……だからお願いね、アイルアート」

「御意」

医師アイルアートにその場を頼むと、シャナは座ったばかりの椅子を離れ、寝室をあとにした。胸中はざわめき、悔しさに押し潰されそうだった。

廊下に出ると、いつかシャナがそうしてしゃがみ込んでいたように、ノエが不貞腐れたように壁際の床に座っていた。

「ノエ」

呼びかけながら歩み寄り、ノエに視線を合わせてシャナも屈む。

「礼を言うわ、ノエ。国の体面を考えてくれて、ありがとう」

「礼を言われるようなことはしちやいませんよ」

「とても助かったわ。それから、ごめんなさい。クロに怪我を負わせてしまったわ」

「それこそ謝られちゃ困ります。騎士としての立つ瀬がないでしょう」

「いいえ。これはわたしの責任よ。デイランの王子に、クロを逢わせてしまったのも」

「ごめんなさい、と改めて謝ると、ノエは複雑そうな顔をした。

「上の者が下の者に謝るのは、どうかと思いますよ」

「あなたは精霊だもの。人間のそれには、関係がないはずよ」

「まあそうですね……気分は騎士なんで、そう扱っていいですよ」

人間として生活している時間が今も続いているから。ノエはそう言って、肩を竦める。

「あなたは変わった精霊ね」

「レスなんで」

「レス？」

「高位、という意味です。最高位は、セス」

「それは人間で言うところの、貴族階級みたいなものかしら？」

「似たようなもんですね。精霊位ですから。まあ、人間ほどごちゃごちゃした関係じゃありませんがね」

精霊界にもさまざまな秩序、理があるようだ。

「……ねえ、ノエ」

「なんです？」

「あなたの力は、どれくらい大きいの？」

レス、というのが高位で、セス、というのが最高位だということなら、レスの位にあるノエの力は、上から二番にあるということだ。それはかなり大きな力を持つということではないだろうか。

「おれの場合は器が大きいだけですよ」

「器？」

「おれってという精霊の、ね」

ニツと笑うノエに、そういうことではない、とシヤナは脱力しながら首を左右に振る。

「精霊が契約主のそばを離れて行動するなんて、考えられないわ。だから、それほど大きな力を持っているということでしょう？」

「ああ……おれは命令されているからセイエンのそばを離れて行動できるだけです。もともとおれはクロのためだけに召喚された精霊ですし、そう命令されてもまあクロならいいかなと思っただけ。だから器が大きいんですよ、おれは」

「冗談で器のことを言っていたわけではなかったらしい。

「命令……けれど、おばあさまは亡くなられたわ」

「そうです。だから、その命令に従う義務はない。命令が契約内容なんでね。今おれが力を使ってるのは、クロを気に入ってるからです。赤ん坊の頃から知ってるし」

つまりクロは、気紛れな精霊のそれだけで、生きていくということになる。それはなんと危うい均衡かと、シヤナは僅かに眉をひそめた。

「ノエ、前に提案があると、言ったわね？」

「ん？ ああ、そういえば言いましたね」

「わたしがそれを理解できるまで、待てると言ったわね？」

「姫ならわかると思ったんで。わかつたんですか？」

わかるようで、わからない。以前ノエが提示したものは、シヤナならそのうち理解できると言ったものだが、あれから数日経った今でもよくわかっていない言葉だ。

ただ、一つだけ言えることがある。

「わたし……クロを失いたくないの」

その気持ちに気づいてしまった。その想いを、大切にしたいと思うようになってしまった。だからなんとしてでも、ノエの提案というものを理解しなければならぬ。

「姫、答えは目の前ですよ」

「わからないわ。どうすれば、わたしはクロを失わずに済むの？」

「だから目の前なんですよ」

「……目の前？」

比喩ではないのか、とシヤナはじつとノエを見つめる。

こうして見ると、ノエはどこかクロに似ていて、夕焼け色の双眸などはそっくりだ。ただ、クロほど眠そうな顔ではなく、精霊だといふのにそれらしくない、騎士の顔をしている。こんなに人間味溢れる精霊も、世界には存在するらしい。

ふと、閃いた。

そうだ、ノエだ。

「あなたならクロを助けられるわ」

「そうですね。おれはそういう精霊ですから」

「ノエ、お願い。わたしはまだクロのことを半分も知らないの。もっとクロを知りたいの。そのための時間を、わたしにちょうだい」

時間が欲しい。クロがクロだから、こういう気持ちになったのだ。これがクロ以外の人であったなら、シャナは心を開くこともなかっただろう。シャナを好きだと言い、ごめんねと謝るクロに、シャナは真正面から向きあいたい。

「じゃあ姫、気紛れな精霊と契約しましょうか」

にこりと笑んだノエが、そう言った。

「ただし、条件があるんですけどね」

常々「走るな」と注意される廊下を、誰かが走っている。なんだか騒々しい。なにかあったのだろうか。デイラン国が、なにかしらの動きを見せたのだろうか。

「騒がしいわね」

書類から顔を上げて首を傾げると、補佐官フィルも一緒になって首を傾げる。

「今日は特に議会が招集されるようなこともなかったと思いました
が……ちよつと見てきます」

「お願い」

静かに午後の政務に勤しんでいるのは、シャナの周りだけなのか。フィルが部屋を出て様子を見に行ってくれたが、まもなく戻ってくる。

「フィル？」

「殿下、クロネイさまが……っ」

クロの名にどきりとしながら、なにごとかとシャナは立ちあがる。熱が下がってからのクロは、安静を言い渡されておとなしく部屋で休んでいた。シャナとお茶をしたいというから、その時間になる

とシヤナのほうから出向くようにし、できるだけクロを動かさないようにと気をつけたのはつい最近のことである。怪我也順調に癒え、無理さえしなければ悪化するようなこともないと、医師アイルアールトからの言葉もあった。

「クロがどうしたの」

「シヤナ！」

それは気圧されるほどの、声だった。

ファイルを押し退けて部屋に入ってきたのは、寝間着のまま部屋を飛び出してきたらしいクロで、固定されている脇腹を押さえながら息を乱している。まだ動いてはならないクロがここにいることに、シヤナは瞠目した。

「な……にを、しているの、クロ！ 部屋に戻りなさい！」

「シヤナ、ノエになにを言ったんだ！」

「！ ノエに……？」

「ああもう……なにがどうなってこんなことに」

やり場のない感情に戸惑っている様子のクロが、頭を抱えてふらりとよろめく。倒れそうになったところで、シヤナは慌ててクロに駆け寄りその身体を支えた。それなりの重さを覚悟していたのだが、思った以上にクロは軽く、力が余ってしまったので急いで往なす。その反動で、けっきょく床にふたりして転んだ。

「軽過ぎるわ、クロ。こんなに痩せていたなんて……ちゃんと食事しているの？」

「それどころじゃないよ。ああでもこの体勢は美味しい。シヤナのふかふかの胸……、じゃなくて！」

どさくさに紛れて抱きつかれているが、それはクロ本人も無意識のうちに行っていることのように、ぐっとシヤナに顔を近づけると上目遣いに覗んできた。

「ノエになにを言った？ それとも、ノエになにか言われた？ どつち？」

「……クロを部屋から出さないように、とは言ったわ」

「違う！ いや、違わないけど……そうじゃなくて、あの話をされたんじゃないのか？」

「あの話？」

なんのことかしら、と思ったのは、誤魔化そうとしたからではなく、本当にわからなかったからだ。

「契約だよ。おばあさまがノエとそう契約したように、シヤナもつて……そういう話をされたんじゃないのか？」

「ああ……」

「したのか！」

決起迫るようなクロの姿に、シヤナの目が丸くなる。そんなにすごい話ではないのに、むしろクロには喜ばしい話なのに、なにがいやなのか怒っているように見えた。

「どうして！ シヤナには天恵がないから、しないと思ったのに……」

「天恵はないけれど、わたしには恩寵があるのよ」

「え……っ？」

「この国の王女として生まれ、国を背負う者としての、恩寵があるのよ」

それは、運命、と言つのかもしれない。

シヤナはセムコンシヤスという王国に、王女として生まれ落ちた。シヤナのほかに子に恵まれなかつた王家は、これもまた運命だと受け入れ、シヤナを幼い頃から統治者として育て、国を護るすべてを教えた。シヤナには天から恵まれたものがない、それでも、そういう恩寵は与えられたのである。天恵とは神から与えられた特別な力だが、国から与えられる恩寵もあるのだ。

「地の力、だそうよ」

「地？」

「地の女神アヌさまは、わたしのそれを、認めてくださつたそうなの」

ノエから聞かされた話を、未だ信じられないところはある。それでも確かに、シヤナはノエと、契約をすることができた。

「わたしがあなたの命を護りたいと思うことは、そんなに、おかしいこと？」

「……ノエと、契約……したのか」

「したわ」

してはならないことを、したとは、思っていない。クロを失えないと思つたからこそ、信じられない話を確証もなく受け入れた。けれどもそれは、クロを思つてのことではない。自分自身が、クロを失つたらどうなるかわからなくて、怖かつたからだ。

「なんで、そんなこと……おれはシヤナに、そんなことをさせるつもりなんか、なかつたのに」

「わたしが望んだことよ。あなたを……失えないの」

「シヤナを失えないおれの気持ちも考えろよ！」

そう怒鳴られて、吃驚する。

「なんでそんな無茶するんだ。おれが、死ぬために国を出たって、そう言ったから？ ノエがないとだめだって、もう命数が尽きるんだって、そんな……そんな保身を、言ったからか？」

「クロ……待つて、どうしてそうなるの？ わたしは言ったわよ？ あなたを失えない、これはわたしが望んだことだって」

「おれはシヤナに、おれのこと振り回されて欲しくない！」

思わず、カツとなってしまう。

「わたしを好きだと言ったのはあなたよ！ 振り回されて欲しくない？ もう充分だわ。あなたのその言葉に、わたしがどれだけ振り回されていると思ってるのよ！」

「シヤナが好きだから、それはもうどうしようもないだろ！ おれだって、予想外だったんだから！」

「だったら国から出なければよかったですよ！ そうすればわたしはあなたに出逢うこともなく、ノエと契約することもなかったわ！」

「生き長らえたくなかったんだよ！」

圧倒される言葉に、反論の余地を失った。

「おれの身体は、命数を延ばしているだけだ。脆弱なこの身体を治すことはできない。ミストだって治せなかったんだ。神さまにも見放されたこの身を、ミストは、だから気に入ったと嘯いておれを友と呼んだんだ。同情で神さまに気にかけてもらっていただけなんだよー！」

「クロ……」

「だから……っ……だから国を出たんだ！」

シヤナに抱きついていていた身体が、ふっと離れていく。

「クロ！」

きらきらと光るものが、宙に飛んだ。それがクロの涙だと、気づけないわけがない。

「クロ、待って！」

追いかける手のひらが、届かない。走り去る姿を、自分がしたことに後悔を感じないシヤナは、追いかけることもできない。

ふと、ノエの言葉を思い出した。

「走らないで、クロ！　お願いよ、お願いだから、身体を大事にして！」

そう叫んだときには、もうクロの姿はなかった。

『ただし、条件があるんですけどね。ついでに、理解してもらいたいことも、一つだけあるんです』

『……なに？』

『まずは条件から話しましょうか。国の恩寵があるあなたの力を、少しばかりわけてもらいます。おれに、ではなく、クロに、です』
『わたしの恩寵？　わたしに天恵はないわよ？』

『姫はあるんですよ。神からの恩寵ではなく、国からの恩寵が。だ

から姫は、将来この地の王となる。とはいえ、それは一重に姫の努力の結果です。姫が国を護ろうと必死に勉強しなければ、国からの恩寵は得られなかったでしょう」

『国からの……わたしは国に必要とされている？』

『その恩寵が証明しています』

『そうなの……それで、その恩寵をどうやってクロに？』

『姫にある恩寵でおれと契約したら、クロを夫にしてください』

『……それだけ？』

『それだけ、なんて言わないでくださいよ。これが重要なんですから』

『クロを王族に迎え入れることは、もう決定しているわ』

『姫には重要です。クロを王族に加えるというのは、あなたの夫とするということなんですから』

『？ そうよ？』

『あー……わかっていませんね、姫。おれは、姫に、クロを夫に迎えると言っているんですが？』

『迎えるわよ？』

『……姫、おれがセイエンの命令でクロを護っているのは、クロがセイエンの孫だからです。血縁にあるからです。姫とクロの場合、血縁にはないんですよ。それなのに、どうやっておれは姫の命令を聞いてクロを護ればいいんですか？』

『契約主の言葉には絶対ではないの？』

『そうだったらよかったですけどね、生憎と精霊位が高位までくると、これがかかなりの自由があるんです。絶対的ではありません』

『気難しいわね……』

『精霊とはそういうもんです。だから、血に縛られたりもするんです。セイエンはそれを利用したわけですよ』

『わたしの場合、クロを夫に迎えることで、ノエにその命令を聞かせることができるのね？』

『そこです、姫。意味、わかってます？』

『それは……つまり……』

『赤くなるってことは、わかってくれましたね。じゃあそうしてください。これで名実ともにクロはあなたの夫、あなたの血族です。おれはあなたの命令に従う。条件はそれだけです。まあ人間世界でも、一度契れば永続的でしょう。どんなに後悔しても、クロはあなたのものだ』

『そ……そうすることで、クロを失わずに済む、のね？』

『はい。そこで発生するのが、さっきも言いました理解してもらいたいことです』

『一つだけあると、言っていたわね』

『ええ。一つだけ、理解してもらいます』

『なに？』

『クロの病が治るものではない、ということですよ』

瞬間的に思い出したノエとの会話に、シヤナは唇を噛む。

「ノエ、あなたの言う通りだわ」

両手を組み、祈るようにそこに顔を埋める。

「クロの苦しみは終わらない……命を、命数を、延ばしているだけだもの」

クロは、ノエの力で生きている。いや、生かされている。だから死ぬことはない。

けれどもそれは、長い苦しみを、クロに与えている。

クロの病は治ることはない。脆弱な身体を、健康にすることはできない。怪我をしてすぐに治ることもなければ、風邪を引かないなんてこともない。

ただ、命数を延ばしているだけ。
どれだけの苦しみがクロを蝕んでいることだろう。クロは、それから解放されたかったのかもしれない。

「ごめんなさい、クロ……それでも、わたしはあなたを失えないのよ」

好きだ、と。

思ってしまった。

失えないと思ったときに、それが愛だと、気づいてしまった。クロと出逢う前の自分には、もう戻れない。

『人間てのは、いつの時代も、愛に葛藤するもんですね』

気紛れな精霊の言葉に、その通りだと、シャナは苦笑した。

だから、これは悟られてはならないのだ。

ノエとの契約は成った。けれども完全ではない。ノエにその命令をするまで、なにかに気取られてはならない。

婚礼まで残り僅かな日数、その日が待ち遠しい。

「ごめんなさいね、クロ……わたしはあなたを選んでしまったわ」

その苦しみを半分、背負うから。

その悲しみを半分、背負うから。

すべてを分かち合って、生きよう。

それがシャナに、唯一できること。

病み上がりでよかった、と言った。
目先のものに急いで走ることが出来るから、と。

その瞬間、シヤナは現実を否定した。

「また、デイラン国なのね」

「はい、トワイライ帝国に宣戦布告を」

「その判断は、王になるうとしてしている自信過剰な王子かしら？」

「ほかにおりませんでしょう」

「最悪ね」

一度は落ち着いたと思ったのに、とシヤナは抑えきれなかったため息をこぼす。幸せが逃げる、という言葉は、今日から誰からもなかった。皆がため息をつきたい気分だったからだ。

「トワイライに勝てると、本気で思っているのかしら」

「自信過剰でありますれば」

「交渉材料はなに？ ちなみにうちは、トワイライ側よ。同じように、各国もトワイライの側につくでしょうね。誰もデイランには味方しないわ」

「なにか企んでいるようではありましたが……さっぱりわかりません。なにがあそこまで自信過剰にさせているのでしょうかね」
「知りたくもないわ」

大げさなほど肩を竦めたあと、シヤナは座卓に向かい、白紙にさらさらと文字を連ねる。印を押して封をすると、ファイルに手渡した。

「これを王陛下に。了承を得たら、早急にトワイライの皇帝へ。急いで」

「御意。至急、馬を走らせます」

「お願いね」

ファイルを走らせたあと、さてどうしたものかと、シヤナは座椅子に埋もれて考える。

デイルン国とはずっと微妙な関係が続いている。それは統治者が変わらない限り、永続的に続くだろうと思われる。関係が悪化し、開戦になるかと思われたこともあったが、それはクロが身を呈して出した脅しによって回避されている。デイルン国も、唯一の資源であり独占的である銀山を、みすみす手放したくなかったのだ。だが、それも終わりだ。なにを思ったのか、敵に回してはならない大国を相手に、宣戦布告した。デイルンもお終いだ。銀山は、大国トワイライの手に委ねられることだろう。それがデイルンの国に産まれた者にとつて、救いとなるかどうかはわからない。だが確実に、人々の生活は改善されるだろう。開戦によってたくさんの人々の命が犠牲になるだろうが、それも仕方のないことだ。せめて一日も早く終わりとなるよう祈ることしかできない。

「争いごとが多いですね、ここは」

「ノエ」

「クロとも喧嘩してなかったですかね、姫は」

「黙って。余計なお世話よ」
「考えることが多くて大変ですね」
「黙ってと言っているの」

口を挟んできた気紛れな精霊は、珍しく騎士服を着用していない。クロが半ば臥せっているのも、その世話をするのに邪魔だとかで、侍従の恰好をしているのだ。ただ、その腰には剣を帯び、なに者なのかわからない存在になっている。思わず、誰よあなた、と言いたくなるのは仕方ない。

「それで？ クロの様子でも伝えにきてくれたのかしら？」
「姫の命令を聞きにきたんですよ」
「わたしの？」
「たぶん、馬だと間に合わないでしょうから」

そうノエが言ってすぐ、フィールドではない別の補佐官が、予告なく扉を開けた。

「殿下！」
「なにごと？」
「申し訳ありません、入られてしまいました！」
「……入られた？」
「デイランの王子です！」

ぎょっとする。宣戦布告の話聞いたばかりだ。

「どっして……ここに来るにしても、時間が……早過ぎるわ」
「どっやら、こちらに向かう途中での、宣言だったよっでございませ
す」
「道中で……なんて愚かなの。本当に最悪だわ」

「殿下、いかがなさいましょう」

そんなの決まっている。追い出すしかない。けれども、追い出すにしても、正式な文言が必要だ。つまり国としての体裁と措置が必要になる。宣戦布告を聞いたばかりでは、いくら準備していたとはいえ、間に合わない。入られたということは、デイラン国の王子は城下まで来ているということだ。そこまで来られてしまったは、こちらとしてはなに用あつてのことかと、迎えなければならぬ。

「わが国がトワイライの側につくとわかっていながら危険を冒したのなら、こちらになにか、交渉材料にでもなるものがあるのでしょうね……なんだというのよ」

「まあ一つ言うなら……」

「ノエ？」

「クロでしようね」

意外な言葉に、シャナは首を傾げる。

「なぜ、クロなの？」

「アースの最大の弱点だからです」

「……先帝陛下の？」

「クロが言ったでしょう。おじいさまは自分に甘い、と」

瞬間的に、頭が回転する。その早さには、自分でも驚いた。

「トワイライに宣戦布告しておきながら、攻撃する場所はセムコンシャス？ 先帝が可愛がるクロがここにいるから、それを脅しに使うおうと？ 道中で宣戦布告したのは、開戦の鐘をセムコンシャスで鳴らすため、準備もできていないわが国はそれで滅ぼされると、そういう展開だと？」

「さすが姫、その通り」
「最悪だわ！」

読みが甘かった。これは注意しながら自分のことに気取られたシヤナの失態だ。国を護ろうとしてきたことが、結果、自身で国を追い込む事態を招いている。

「王陛下はなんと言っているのっ？」

「下まで来られては拒否もできない、と。ですが、殿下の判断に任せると仰せでした。時間稼ぎは任せろ、と」

「さすがは王陛下ね……」

責任はシヤナにあると、父王は最後までシヤナに責任を取らせる判断をしたようだ。それなら、フィルに任せた書面は、トワイライ帝国へ届けられることだろう。だが、間に合わない。

「……ノエ」

「はい」

「わたしの命令が聞けるかしら」

真っ直ぐ見据えた精霊は、それが当然のように笑んでみせた。

「今すぐトワイライへ。強力な助けが必要な」

「助け、なんて……おれに対して言うもんじゃないですよ」

「頼めるかしら？」

「条件が一つ」

「なに？」

「今すぐ王族の系譜に、クロの名を」

「……わかったわ。行って」

「では、よろしく」

まるで遊びに行くような気軽さで、ノエが壁をすり抜けて消えていく。これでどうにか父王の時間稼ぎが有効利用されればよいが、せいぜい明日までの限界だろう。

「エリオン、王陛下のところへ」

「はっ」

「系譜にクロの名を、と。血印はすぐに運ばせるわ。わたしとノエの、先ほどの会話もお聞かせして」

「御意」

エリオンを走らせると、シヤナはひとりになって、たびたび椅子に埋もれる。いつまでもそうしているわけにもいかず、数分で身体を起こすと、乱暴に扉を開け閉めしてクロのところへと向かった。

喧嘩の最中ではあるが、今はそれどころではない。ただでさえクロの命は先が不明瞭だというのに、デイランという国が横やりを入れ、不安定だ。あんな国にクロを渡してたまるかと、そういう想いにかられる。

「クロ、入るわよ」

部屋のあるじは併設した寝室にいるだろうが、控えている侍従のためにその声をかけてクロの部屋へと入る。

と、寝室で休んでいるはずのクロが、部屋の中央に立っていた。

「クロ……どうして」

「聞こえたから」

にこりと、喧嘩をしたという気配すら見せない笑みで、クロは準

備を整えていた。いつもの神官服ではなく、シヤナが選んで用意した王族の衣装とまもっているのだ。おそろしくどうでもいいことだが、そういう恰好をさせれば皇子に見えるから不思議だ。おまけに帯剣までしている。腰に剣があるクロなど、初めて見た。

「かつこいい？」

見惚れていたシヤナに、クロが揶揄するように言う。

「……剣を扱えたのね」

動揺しながらも言えた言葉に、自分でも呆れる。嗜みがあって当然だ。

「これが意外、おれは武闘派でね。だからノエとふたりだけで、ここまで道のりを旅できたわけ」

「……本当に意外だわ」

「一つくらい特技があってもおかしくはない。脆弱でもね」

なにもできないわけではないのだと、クロは言う。教えてくれたのはノエらしい。そして剣は、祖母からもらったのだという。セムコンシヤスまでの道中で荷を売るということをし、手荷物らしきものをもっていかなかったが、これだけは売らずにきちんと持ち歩いていたそうだ。

「隠していたの？」

「ノエが持ってたんだよ。ふだんもノエが持つてる。そのほうが、相手を油断させられるからね」

確かに、油断させられている。神官服でいるときなどは、まった

く害を感じない。おとなしく、気弱に見える。今とは真逆だ。今のクロは、一国の皇子という雰囲気はひしひしと伝わってくる。見た目でここまで変わる人も珍しい。

「さて……おれはなにをしようか？」

「……休んでいなければだめよ。あなたはまだ傷が癒えていないのだもの」

「平気だよ。こうして剣を振り回せるくらいには、回復した」

「それでも、わたしはあなたを傷つけたくないの。傷をつけさせようとする者は、わたしが排除するわ」

だいじょうぶだから、わたしに任せて欲しい。シャナはそう言ったが、クロは首を左右に振った。

「シャナを傷つける者がいる。おれに、それを許せと？ 無茶な話だ」

「クロ」

「言っただろう、シャナ。おれは、シャナの地盤になるために、ここにいます。シャナの足許は揺るがない。おれが、いるんだから」

デイルン国が交渉材料にしようとしている、そのクロが、なんと勇ましいことか。デイルン国の王子は、この姿を見誤った。彼らが思うほど、クロは弱くない。むしろ手強いだろう。

「行こうか、シャナ」

ふだんが皇子らしくない分、今のクロは別人のような覇気を感じる。

デイルン国の王子に混乱を招かれたシャナだが、クロのその覇気に充てられて、徐々に頭が冷えていった。

「ええ……行きましょうか、クロ」

本当は無理をして欲しくないけれども。

クロをかき立てているものがシャナが存在なら、それはどれほどの喜びだろう。

王の許へ行く前に、とシヤナはクロから血印をもらい、先に運んでもらった。なにをするのかと訊いてきたクロには、式典に必要なからと、無難に答えておく。実際に婚姻が交わされる時、血の印が必要になるからだ。それを先に済ませておくだけのことなので、これという問題はない。

ふたり揃って王の御前に立ったときには、父王は事情を聞き終えて王家の系譜にクロの名を記していた。これでクロは、クロネイ・エイブン・セムコンシャスと正式に名乗ることになる。ノエの条件を一つ、達成させたというところだ。

「もはや城下は、デイラン国の兵に囲まれているだろうな」

「油断しておりましたこと、お許しください。この責任は必ず」

「いや、わたしも油断していた。おまえにはかりある責任ではない。まさかこうくるとは……トワイライへの書状は速やかに届けさせたが、間に合いそうか？」

「ノルイエに届けさせましたので、ぎりぎりになるとは思いますが」

トワイライへの要請は、ノエにかかっている。馬では間に合わないだろうからと、精霊たるノエが動いたのだから、確実に間に合うだろう。だが、それでも時間はたくさん欲しい。デイラン国の王子カルトが城門を抜けるのは、遅かろうが速かろうが確かなことなのだ。

「よもや戦にしようとは、誰も考えなかっただろ。デイルンも地に落ちたな」

「今代の王は賢王であると、聞くのですが……世継ぎには恵まれなかったのでしょうね」

「その点、わが国は恵まれている。よき後継者が揃ったからな」

緊張した空気の中、父王は陽気に笑ってみせる。それが王の余裕であり、戦が起ころうとも無血勝利を確実にしている者の強さだ。

「王陛下、一つ、よろしいでしょうか」

「なんだ、皇子？」

「おれ……いえ、ぼくのはクロネイと」

「ああ、そうだったな。きみはもうわたしの義息子だ。クロネイと、呼ばせてもらおう。して、なんだ、クロネイ？」

「ありがとうございます」

シヤナに並んで立っていたクロが、父王の許しを得て一步前に進み出る。

「デイルン国の王子カルトの狙いは、おそらくぼくでしょう」

「ほう？」

「もし城内で抜刀する事態となったら、大事です。今は迷わずぼくを、向こうへ差し出してください」

なにを言うのかと思いきや、ノエが言っていたようなことに追加するようにクロがとんでもないことを口にする。

「これはわが国の問題で、あなたひとりの問題ではないのよ、クロ」

「ああごめん、言い方が悪かったか。いや、おれに行かせて欲しいってことだよ、シヤナ」

「同じことよ」

これはセムコンシャス王国の問題で、たとえクロがカルトの狙いであっても、その趣旨は変わらない。

「クロネイよ、シャルナユグの言う通りだ。きみは……いや、おまえはもはやわが国の王族、シャルナユグの婿だ。おまえひとりに、テイランを押しつける真似はしない」

「ですが王、ぼくならば油断を誘えます。それに、カルト王子がセムコンシャスに攻めてきたのには、ぼくに責任があります。ぼくは祖国を盾に、カルト王子を脅迫し、挑発したのですから」

「己が分を弁えぬ若造のしたこと。おまえがしたことは、わが国を護る一手。大きな違いだ」

責任を感じる必要はないと、父王は言う。しかしクロの顔色がそれで晴れるわけもない。

「ぼくの虚弱さを知ってなおそうおっしゃっていただけのことに、感謝いたします。ですが、だからこそ、ぼくにできることを、させてください」

「クロネイ……意外に頑固だな」

「自国を護りたいと思うのは、セムコンシャスの民なら、当然のことではありませんか？」

父王の御前で揺るぎなく心を貫くクロに、さすがの父王も苦笑した。

「よき婿を得られたものだ……では、クロネイよ。無理はせず、己れができることを、わが国のためにしてくれ」

「御意。ありがとうございます、王陛下」

本来なら、大国トワイライ帝国の末皇子たるクロのほうに、父王よりも身分は上だ。それはクロが婿に迎えられたあとも変わらない。主上国であるトワイライに、セムコンシヤスは敵わない立場にある。しかしクロのその態度は、トワイライの皇子ではなく、セムコンシヤスの王子だ。

いったいどうしたら、こんなにも、セムコンシヤスを想えるのだろう。いくらシヤナが好きでも、ふつうなら国まで護ろうとは思わないはずだ。けれどもそこには、クロ自身が言った「帰るところなんてない」という、危うさがある。

クロは自らの意思で、前へと、進もうとしているのかもしれない。シヤナの隣に、自分の居場所を見つけたのかもしれない。生きようとしているのだろう。

誰かにその命を護ってもらうのではなく、シヤナの隣で。それならシヤナも、自分のために、クロを護ろう。

「わたしも剣を取るわ」

「シヤナ？」

「あなたはひとりではないの。わたしが、いるのよ」

初めは政治的な絡みのある縁談だった。シヤナにその気はなかった。けれども、そのシヤナを変えたのは、地に足をつけたクロだ。シヤナに、長く生きられないことを黙っていた、クロだ。

「あなたがわたしの隣に立つのなら、わたしもあなたの隣に立つだけよ」

絡めた腕は解かれていない。シヤナは強くクロの腕を抱くと、少しだけ吃驚しているクロに微笑んだ。

「あなたはわたしの夫よ、クロ」

口にしたとたん、錯覚だろうが、クロの周りにたくさんの花が咲いた。それに追いつくように、クロは頬を朱に染め、照れくさそうに頷いた。

場違いな、と笑ったのは、その笑いすらも場違いだろうに、父王だった。

「これから戦が起こるやもしれんというのに……暢気な夫婦だ」

開戦の鐘がいつ鳴らされてもおかしくないこの状況で、確かに暢気なことだったかもしれない。けれども、シャナには必要があった言葉で、クロにも必要な言葉だった。

喧嘩はこれまでだ。いや、クロはシャナがノエと契約したことを、いつまでも根に持つかもしれない。だが、シャナはやはり後悔がない。自分にはクロが必要だと、強く感じる。だからノエとの契約は間違いではなかった。

「しゃ、シャナ……あの」

「なに？」

「く、口づけ！ し、しても、いい？」

そついつ宣言をしてしまうところが歳下だなと思う。

「いくらでもどうぞ？」

笑いながら、組んでいないほうの腕を持ち上げ、手の甲をクロの前に差し出す。さすがにこの場ではこれくらいが当然だろうと思っただが、しかしそれはシャナだけの考えだったらしい。

「シヤナ！」

熱烈な口づけを、唇に受けてしまった。それはあまりにも素早く、驚く暇もなかった。

「やっぱりおれ、だめだ……シヤナが好きで、喧嘩なんてしてられない」

潤んだ瞳でそう言われては、怒ることもできない。父王の目の前でのことだったのに、クロに対しての気恥かしさのほうが際立つ。

「場所を考えなさい……っ」

シヤナに言えたのは、せいぜいそれだけだった。

そして、そんな甘いような苦いような空気が、緊張の中に合った場を大きく包み込もうとして。

「王陛下！ デイラン国です！」

先触れもなく乱暴に開かれた扉からの声に、再び一気に、場は緊張する。

「来たか……デイランも無茶なことをする」

「……王陛下」

「ああ」

父王は頷き、深呼吸ののち前を見据えた。

「迎え入れよ。指揮にはシャルナユグ、そしてクロネイが立つ。己

が役割を果たせ」
「御意」

セムコンシヤス国王の号令は、速やかに伝達された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8141v/>

花咲く歌を夜明けにつなく。

2011年10月9日21時24分発行